



# ある戦いの 物語

---

比良岡美紀

---

(2011年)

---

## はじまりはこんな物語（1）

---

ある人が森の中を、鈴を鳴らしながら歩いていました。その鈴はクマよけにと、その人の友達がくれたものでした。その人は鈴を鳴らしながら、森の奥深くへと入っていきました。木々がうっそうと生い茂り、昼間だというのにあたりは真っ暗です。その人は少し不安になり、引き返そうかと考えました。でも真っ暗なので方角がよくわかりません。仕方がないのでその人は、ずっと歩きました。するとどうでしょう、急に森がひらけて、原っぱに出了ました。とても広い原っぱです。見渡すかぎり人間もいなければ、動物もいません。風がひゅうーと原っぱをわたり、草がいっせいに風になびきました。

「もしもし、そこのあなた」

声をかけられて振り向くと、目の前にはクマが立っています。その人は驚いて鈴を手に取り、いっしょうけんめい鳴らしました。クマは笑いながら言いました。

「いやだなあ、あなたのことを食べたりしませんよ」

その人はちょっと安心して、でも油断せずに言いました。

「ほんとうに、私のことを食べたりしないかね」

「もちろんです、約束しますよ」

その人はやっと安心して、ホッとため息をつきました。

クマが言いました。

「食べたりはしませんが、でもあなたにお願いがあるのです」

「お願いだって？ いったい何だね」

「あなたが持っているその鈴、それを私に返してくれませんか」

「返すって？ どういうことだ」

「それはもともと、私たちクマが持っていたものだからです」

「君たちクマが、鈴を持っていたって？」

「そうです。それは人間が山奥へ来たときに、仲間のクマに知らせるためのものなんです」

「なんだって？」

「あなたも知っているとおり、私たちクマは臆病です。だから人間が来ている間は、外へ出ないよう警告する必要があります。それに、人間を脅す役割のクマもいますから」

それを聞いて、その人はさっと身がまえしました。クマはまた笑って言いました。

「脅すといっても、人間が森の奥で迷子にならないよう、適当なところで追い返すのですよ」

その人は安心して、そしてクマが言ったことをもう一度よく考えました。

自分が持っている鈴は、もともとクマの持ち物だった。それをクマは、人間が森へきたという警告の意味で使っていた。そして人間が森の奥で迷子にならないよう追い返すクマがいて、そのクマへの合図としても使われていた。

その人はクマにたずねました。

「人間がクマよけと称して鈴をつけるようになったのは、いったいなぜなんだろう」

## はじめりはこんな物語（２）

---

クマは言いました。

「ある人が、クマの持っている鈴をほしがったのだと言われてます。それから何度も取り返そうとしたけれどうまくいなくて、鈴はずっと人間が使うものとされてきたのだと、私は父から聞かされました」

「お父さんも、鈴を取り返そうとしたのかね？」

「ええ。つい最近、街へ出ていきました。額に三日月のような模様があります」

そう言われてその人は思い出しました。二日前、街なかでクマが銃で撃たれるのを見たのです。銃を前にしてもひるむことなく、人間たちを見据えていました。額にはたしかに三日月の模様がありました。目の前にいるこのクマは、自分の父親が殺されたことを知っているのだろうか。そう思って、その人はクマの顔をじっと見つめました。

「たぶん、私の父は死んだのでしょうか」

「えっ」

クマはにっこり笑って言いました。

「父がそう言い残して行ったのです。二日たっても帰らなければ、父さんは死んだと思えと」

その人は言葉では言い表せないような、複雑な気持ちになりました。そして、クマに言いました。

「よく分かった。きみの言うとおりに、私はこの鈴を返そう」

「本当ですか？」

「ああ、本当だとも。さあ」

手に持っていた鈴をクマに渡すと、カバンやポケットからもたくさんの鈴を取り出し、全部クマに渡しました。

クマは両手いっぱいの鈴に目を輝かせ、それから目を潤ませて、深くお辞儀をしました。

「ありがとうございます。本当にありがとうございます」

その人は胸が熱くなるのを感じました。

「ほかの人間たちからも、鈴を取り返してきてやろう」

するとクマは言いました。

「いいえ、そういうわけにはいきません。こうしてあなたとお話しできて、気持ちを通じ合わせる事ができた。そのことに私は大きな可能性を感じています。父のためにも私が森を出て、人間の皆さんのところへ行きます」

その人は大丈夫だろうかと不安になりましたが、クマの言うとおりにしようと決めました。

「分かった。私はここで待っているから、何かあったら知らせてくれ」

クマはうなずいて、口笛を吹きました。すると小鳥が3羽、どこからともなく現れて、クマの肩に乗りました。

「私が困ったことになったら、この小鳥たちを知らせにやります」

「分かった。健闘を祈る」

## 作者の迷い

---

ここで僕はペンを置いた。このあと、どうすればいいのだろう。アイデアがないわけではない。それでいいかどうか分からないのだ。

クマは街へ行って人間たちに鈴を返してくれるよう訴えるが相手にされない。それどころか害をなすものと認定され、追われる存在になる。一羽目の小鳥が森へ行き、クマが誰にも相手にされないと告げる。では手助けしよう人間が言うと、クマはそれを望まないと言う。次に二羽目の小鳥が、クマは追われているので身を隠すと告げる。では安全なところへ案内しよう人間が言うと、クマは自分でなんとかすると言う。だがしばらくたって三羽目の小鳥が来たとき、クマは磔にされていた。クマが火あぶりの刑に処される、そう小鳥に告げられ、人間はたまらず森を出る。しかし人間が街に着いたとき、クマはもう死んでいた。人間はクマの死を悼み、自分たち人間の愚かさを呪うのだ。

このあとはまったくの白紙で、何も考えていない。最後まで考えるべきだろうか。それとも書きながら考えるほうがいいのか……。こんな悩みを抱えたのは初めてだ。

ここ数年、夏から秋にかけ、クマが頻繁に街なかに現れるようになった。とくに猛暑で食べ物が不足した年は何度も目撃された。柿や林檎を食べるのはいいほうで、人間を襲うことだってある。それで射殺されることが多くなった。でも本当は、射殺せず共生の道を探るべきなのだ。山から街へおりてくるのだから、もとはといえば人間が山を切り拓いたせいだ。豊かな森のままだったら、クマは楽に暮らせたはずじゃないか。

僕はあすなるひのきというペンネームで子供むけの本を書いている。でも売り上げはあまりぱっとしない。もう十年目だし、そろそろ大ヒットがほしい。本を出しているほぶり舎の編集者、永坂さんにそう言ったら、社会問題を取り入れたらとアドバイスされた。それでクマと人間のことをテーマにしたのだ。構想を話したら、永坂さんも興味を示してくれた。よしいける、そう思った。最初は順調だった。ずっと順調にいくと思っていた。でも……。こんな風にならなくなるとは思わなかった。

永坂さんに相談するべきかな、そう思って時計を見ると、昼の十二時すぎだった。永坂さんはもう昼休み中だ。戻ってくるのはいつもきまって二時間後。と、いうことは、二時すぎまで戻ってこない。

僕は大きく伸びをして、首を前後左右に動かしたあと、席を立てて書斎を出た。そのとたん、あくびが出た。ゆうべはあまり寝られなかったから、少し仮眠をとることにしよう。寝たらいい考えが浮かぶかもしれない……。そう思って廊下へ出た。少しふらふらしながら歩いて寝室へ行き、ベッドの上に腰かけた。するとまたあくびが出た。

「ふわあ〜」と、後半はかみ殺すようにしながら伸びをして、ベッドに横たわった。深呼吸をして目を閉じる。でもすぐに目を開けた。

「そうだ、メモしておかなきゃ」

## クマの来訪

---

僕は起き上がり、もう一度書斎へ行った。書きかけのノートが机の上に広げられている。立ったままペンを取り、さっきのアイデアをノートに書きつけた。それもできるだけ具体的に。火あぶりになる場面は絵も添えた。そのほうが、永坂さんに伝えるのに役立つと思ったのだ。

すべてを書き終えた僕はまたあくびをしながら寝室へ戻り、ベッドに横たわって眠りについた。

「もしもし、あすなろさん。もしもし……」

「う～ん……」

「あすなろさん、起きてください。お願いします」

「むにゃむにゃ……」

「あすなろさんったら！」

バチンという衝撃を太ももに感じ、僕は声をあげて飛び起きた。

寝ぼけまなこをこすりながら寝室の中を見まわす。何も変わったことはない。

夢だったのか？ でも夢にしてはやけにリアルだった。まだ痛みが残っているし、とって太もものあたりを見た僕は、ふたたび声をあげた。

「う、うわあ……」

僕の太ももには、小さなクマが張り付いていたのだ。

クマは僕と目が合うと、にっこり笑って言った。

「やっと起きてくれましたね、あすなろさん。はじめまして、ぼくはヨハンです」

「ヨハン……？」

「はい。ぼくはあなたのお話の中からやってきました。あなたが書いたあのお話は大変なことになっているのです」

僕は目をつぶった。閉じた状態のまま深呼吸をしながら、心の中で、落ち着け、これは夢だ、と自分に言い聞かせた。

「残念ですが、そんなことをしても何の役にも立ちませんよ」

「えっ？」

僕が目を開けると、クマは本当に残念そうな顔で言った。

「あなたがあのお話を終わらせてくれないと、僕は、いえ僕たちは、どうすることもできないのです」

僕はもう一度目を閉じ、力いっぱいほっぺたをつねってみた。

「いてててて！！」

あまりの痛さに目を開けると、クマが僕のすぐ目の前にいた。

「そんなことをしている場合じゃないんです。事態は急を要するんですよ」

僕はあきらめてクマの話を聞くことにした。

「いったい何だと言うんだね」

## クマの言い分

---

「さすがはあすなるさん、切り替えが早いですね。あなたがノートにメモ書きした部分についてですが」

「メモ書きした部分……という、クマが火あぶりになるところかな」

「そうです。あのあと怒ったクマが人間に宣戦布告をしたのです」

「ばかな、そんなことひと言も書いてないぞ」

「そう、それが問題なのです」

「問題？」

「あなたが書かなかったから宣戦布告が行われ、クマと人間は戦争状態になったのです」

書かなかったから戦争？ どういうことだ？

「考えてみてください。仲間が火あぶりにされて、黙っているわけじゃないじゃないですか」

「そんな……」

腑に落ちないことだらけだった。これが現実だとして（頬の痛みは消えていない）、このクマはいったい何者なのだ。

「ヨハンといったね、きみは僕のお話の中からきたそうだが……あのお話にきみのことは書いていないはずだ」

「そのとおりです。でも、火あぶりにされたクマは書きましたよね」

「ああ」

「ぼくはあのクマの孫です」

孫だって？ 子供も書いてないのに？ もうダメだ、理解できない！

「すまないがもう少し寝かせてくれないか。寝たら続きを書く。頼む」

ヨハンはとても悲しそうな顔で言った。

「それは、できません。長老から、あなたを連れてこいと言われていています。一人では帰れないんです」

「無理だ、僕は何の役にも立たない。頼むから寝かせてくれ」

何度も懇願したが、ヨハンは頑として譲らない。彼の言い分は分かるつもりだ。でも僕には何もできない。どうしたらそれが分かってもらえるのか。

「わかりました、じゃあこうしましょう」

しばらく押し問答を続けたあとヨハンが言った。

「あすなるさんはペンとノートを持ってください。そしてぼくの体にさわっててください」

ヨハンの口調には有無を言わせぬものがあり、僕はとにかく従うことにした。まず書斎へ行かなければ……。

「これでいいかね」

僕はノートにペンを挟んだ状態で小脇に抱え、反対の手でヨハンの体をつかんだ。

「上出来です。行きますよ！」

行くって？ どこへ……？ 僕の体はふわりと浮き上がり、書斎のドアを通り抜けた。すると廊下に突然黒い円ができ、急速に大きくなっていく。まさか、この中に入るのか？

「さすがあすなるさん、いい勘してますね！」

## 物語の中へ

---

ウソだろ、と思った瞬間、強力な力が円の向こう側から働いた。呑みこまれまいと抵抗したが、抵抗すればするほど力が強くなる。ついに僕はあきらめた。そのとたんひゅうっと音がして、間もなく全身に大きな衝撃が走った。

「あいててて……」

起き上がって腰をさすった。腰だけでなく背中も痛い。じんじんする。冷湿布を貼ったらさぞ気持ちがいいだろう。

「そいつが作者か」

頭の上で声がした。顔を上げると、ひげをはやしたクマが僕の顔をのぞきこんでいる。その周りにも大勢のクマがいた。いつのまにか、クマに囲まれている。ごくりとつばをのみ込んだ。

「そうです、あすなるひのきさんです」

隣でヨハンの声がした。そのとたん、怒りが込み上げてきた。文句を言おうと隣を見たら、あんなに小さかったヨハンが、ふつうの子グマと同じ大きさになっている。

「ヨハン、その体……」

「これが本来の僕の姿です。外ではこの姿を保てないんですよ」

ヨハンは後ろ足に体重をかけ、姿勢よく立っている。見ると、そこにいるクマたちはみな、四つん這いではなく後ろ足で立っていた。

「長老、あすなるさんをお連れしました」

ヨハンが部屋の奥へ声をかけると、僕の周りにいたクマたちが無言で場所を空けた。張りつめた空気が漂う。しばらくして、年をとったクマが出てきた。さっきのクマよりさらにりっぱなヒゲをはやし、ヒゲも全身の毛も真っ白だった。そして、やはり二本足で歩いている。

「ご苦労じゃった」

うなずきながら、ヨハンに向かって言った。そして僕を見て、にっこりほほ笑んだ。その瞬間、全身が麻痺したみたいに動けなくなった。よく雷に打たれたみたいと言うけれど、本当にそんな感じだった。

さっきのクマが、うさんくさそうに言う。

「こんなやつ、何の役に立つんですかね」

むっとした。もっと違う言い方があるだろう。

「まあそう言うな、イワン。仮にもこの物語の作者なんだ。丁重にお迎えせねばならん」

そうそう、長老の言うとおり。

ちえっ、と不満そうにイワンが横を向く。いい気味だ。

「さてと、あすなるさんでしたな」

「は、はい。そうです。あすなるひのきです」

「ヨハンからお聞きおよびかと思いますが、わたくしめからも説明をさせていただきます」

僕は正座をしたが、背中と腰がひどく痛むので、へっぴり腰というか、えらく妙な格好だった気がする。でも長老は気に留める様子もなく、おほんとかいひをした。

## 戦いの様子

---

そのとき、ドーンという音がして、建物が大きく揺れた。クマたちはおびえ、悲鳴をあげるものもいた。

「おいでなすったな」

イワンの言葉に、ヨハンもうなずいた。

「おいでなすったって、何が」

「攻撃です。人間側の」

ヨハンが言った。

攻撃？ 本当に、そんなことが？ また大きな音がした。こんどはまず地響きがあり、それが収まらないうちに建物が揺れた。さっきより激しく揺れている。

「しっかり！」

声に振り向くと、クマの乗った担架が何台も運び込まれている。みんな頭や肩から血を流し、うめき声を上げていた。どこからか、白衣に身を包んだクマたちが現れた。

「ナンシー、頼む！」

ナンシーと呼ばれたクマはイワンの声にうなずくと、てきぱきと指示を出す。あっという間に何台もの担架が運ばれていった。

「これが現実だよ」

イワンが、厳しい表情で言った。

「この現実の中で、俺たちは生きているんだ」

そのとき、窓の外で何かが光った。

「わあ、きれい」

声の主は、肩までの黒髪を後ろで束ねていた。よく見ると、頭の上に耳がない。クマたちはみんな、耳が頭の上についている。でも彼女は 彼女の後ろ姿は、人間そのものだった。

「あの人？」

イワンは心底面倒くさそうな顔で、ぷいと横を向いた。仕方ない、自分で確かめよう。

窓に近づくと、外を見つめたまま彼女は言った。

「ねえ、きれいでしょう。パーっと光って、花火みたい」

花火……？ ひゅう～と音がした。次の瞬間、顔を覆いたくなるほどまぶしい光が、目の前に広がった。細目を開けると、ところどころにクマの姿が見える。照明弾か。草むらに身を隠しているのが丸見えだ。続いて連続射撃がやってきた。ババババババ、とものすごい音がして、クマたちが撃たれていく。

この光景を前に、僕はどうしていいか分からなかった。ヨハンの話を聞いたとき、正直、子供のケンカみたいなものだろうと思った。でも

また担架が運び込まれた。手や足を吹っ飛ばされたクマたちが、息も絶え絶えになりながら、必死に生きようとしている。でも僕は、こんな光景見たくなかった。思わず両手で顔を覆う。そして祈った。誰に分からない。神様かもしれない。もうここにいたくない。お願いだ。僕をここから連れ出してくれ。



## シェルターへ

---

「見るんだ！」

イワンの声に、飛び上がりそうになった。顔を覆った両手が、毛むくじらの手で強引にはがされる。

「やめてくれ。僕は見たくない！」

「見るんだよ。自分のしでかしたことを目に焼き付けろ」

「いやだ、いやだ。僕はここを出るんだ」

「いい加減にしろ！」

びくっとして、おそるおそるイワンを見た。

「すべてをしっかりと見る。それがあんたの義務だ」

僕の、義務……。

「そのとおりじゃ」

僕の目の前に、真っ白な毛のクマが現れた。長老と呼ばれていたクマだ。

「ここでは落ち着いて話もできません。あすなろさん、地下のシェルターへ来てくださらんか」

「シェルター？」

長老はうなずいた。それを受け、ヨハンが言う。

「地下にシェルターを作ったんですよ。人間の攻撃に備えて」

攻撃に、備えて？ そんな。まさかシェルターまで作るなんて。

「そんなの、まるで……」

「まるで本当の戦争みたい。ですか」

そうだ、本当の戦争みたいだ。僕は大ききうなずいた。長老はにっこり笑った。

「もちろん、本当の戦争ですとも。そうでなければ、作者のあなたを呼ぶはずがない」

ハッとした。そうでなければ、僕が呼ばれるはずない。その言葉に、事態の深刻さがあらわれているようだった。

「さあ、どうぞ」

シェルターは、先ほどまでいた場所と変わらないように見えた。

「驚いたな。さっきの場所そっくりだ」

「もちろんです。すべての機能が再現されております」

そうなのか……。

「かおるには、もうお会いになりましたかな」

見ると、先ほどの女性がそこに立っていた。

「かおるさん、とおっしゃるのですね」

「さよう。主に私の身の回りの世話をしてくれております」

「あの、かおるさんは、その……」

「人間ですわ」かおるはにっこり笑って言った。

## 長老の話

---

さて、と長老は言った。

「すべての始まりは、あすなろさん、あなたが物語を中断してしまわれたことでした」

長老は一つ咳払いをした。

「ですが、謝罪には及びません。あなたなりに悩まれたうえでのことでしょう」

「そうなんです。どうしても先が思いつかなくて……」

長老はそうでしょう、と言いながら何度もうなずいた。

「ただ困ったのは、あまりに仔細にメモ書きをされていたことです」

「火あぶりになる場面のことですね」

「そのとおり。絵まで添えられておりましたからな。もちろん、そうする必要があったのでしょう。当時のあなたは我々のことをご存じなく、いかんともしがたいのは承知しておりますが、いま一度我々のことを考えていただけておったらと、そう思わずにはいられんです」

長老はため息をついた。

「それでですな、あすなろさん」

「はい」

「あなたにはぜひ、この戦争、そしてこの物語に、決着をつけていただきたいのです」

「決着……」

「さよう。これ以上、無益な戦いを続けてはいけません。我々のためにも、人間のためにも」

長老は、僕の隣にいるヨハンの頭をなでた。

「小鳥たちから、クマが帰らないと知らされたとき、大勢の仲間が森におりました。その中には、この子の父親もおりました」

「火あぶりになったクマの息子さんですね」

「今のこの子と、同じくらいの年頃じゃった」長老はまた、ため息をついた。

「我々は激怒した。無理からぬことです。親子二代にわたり、人間に惨殺されたのですから」

惨殺？ それは違う。そんなつもりで書いたんじゃない。叫ぼうとしたが、声にならなかった。

「あすなろさん」

「はい」

「この戦いを、終わらせてくだされ」

長老の眼差しは、じっと僕を見据えていた。

「このとおり、どうかお願いいたします」

長老は深く頭を下げた。僕は驚いたが、周囲のクマたちはもっと驚いたようだった。長老、そんな、という声が聞こえてくる。僕はあわてて言った。

「わかりました、僕にできることなら何でもします。だからどうか、頭を上げてください」

長老は頭を上げ、笑顔で僕の手を握った。ありがとう、どうかよろしく、と言っている。

僕は心から申し訳なく思い、早急に事態を收拾しようと決心した。僕にしかできないことだ。僕は、この物語の作者なのだから。

## ワーキングチーム

---

「問題は、どう巻き返すかだよなあ」

僕は腕組みをして言った。

「えっ、何も考えてないんですか？」

ヨハンが驚いたように言う。

「あれからもう三日も経ってますよ」

そうなのだ。ワーキングチームが発足し、僕を含めた数名で戦略を練ることになったが、この三日で戦況はかなり悪化していた。

人間許すまじ、と立ち上がったクマたちだったが、いかんせん武器が不足している。あるのは原始的な、と言っては失礼だが、単純なつくりのものばかりで、人間をやっつけられるものではない。いっぽう人間は、僕が見たように、統制のとれた攻撃でクマたちを追いつめている。この絶対的不利をひっくり返す、画期的な策が必要だった。

「こんなやつ放っという俺たちで考えようぜ」

イワンの言葉に、またむっとした。長老は、なんだってこいつをチームに入れたのか。イワンだって嫌がっていたのだ。こんなやつに協力したくない、と散々ゴネていた。僕はため息をついた。先が思いやられる……。

「ねえあすなるさん、ほんっとおーに、何も考えてないの？」

僕の顔をのぞきこむようにかおるが言う。理由は分からないが、長老は彼女をチームに入れた。香水の匂いにどぎまぎしながら、僕は言った。

「え、ええ。いや、少しは考えていますが、それでうまくいくかどうか……」

「けっ、どうせ口から出まかせだろ」

「そ、そんなことは……」

言いかけて口をつぐむ。イワンの言うとおりだ。

「まあいいじゃない、みんなでゆっくり考えれば」

ナンシーが助け船を出す。チームとして協力し合おうというその言葉に、僕は胸が痛んだ。一刻の猶予もないのは分かっている。案の定、イワンがかみついた。

「ゆっくりだって？ そんな時間どこにあるんだよ。それなのに、こいつときたら！ まったく、大した作者様だよ」

僕は反論したかった。でも反論する材料はどこにもない。すべてイワンの言うとおりなのだ。

「怒らないで、仲よくやりましょう。よく言うじゃない、昨日の敵は今日の友、って」

「はあ？」

これには全員が呆気にとられた。発言した当の本人、かおるはニコニコしている。彼女はいったい何者なんだ？

「ねえ皆さん、提案なんですけど」

ヨハンが言った。

## 決意と失意

---

「こうして顔をつきあわせていても何も決まりませんから、各自部屋へ戻って考えましょう。それでまた集まって、それぞれ持ち寄った案を検討することにしませんか。どうです？」

いい考えだと思った。みな口々にそれがいい、と言いながらうなずいている。イワンはけっ、好きにしろ、と言ってそっぽを向いてしまった。また胸が痛んだ。僕が不甲斐ないばかりに、みんなに迷惑をかけている。それなら一念発起して最後まで物語を考えればいいのだけれど、とてもそんなことはできそうにない。

しかしやらなければならないのだ。長老と約束したのだし、それにこの物語を終わらせることが、今の自分にとって何より重要だと感じていた。そうしなければ一步も前に進めない、そんな気さえしていた。

「とはいってもなあ……」

僕は書斎でため息をついた。長老が用意してくれた部屋は、僕の部屋と同じ間取りだ。だから書斎を出ると廊下があり、その廊下を進むと寝室へ行ける。なんともありがたいことだ。それなのに、いい案が浮かばない。焦ってはいけないと思うのだが、そう思うと余計に焦ってしまう。持ってきたノートにいくつもアイデアを書いては消し、書いては消し、でもどれもぱっとしない。まるで、僕がいままで出した本の売り上げみたいだ……。

「煮詰まってるみたいだな」

振り向くと、イワンがドアのところに立っていた。戻ったとき、閉めるのを忘れていたらしい。

僕は立ち上がり、イワンのところへ行った。

「ああ、そうなんだ。恥ずかしい話だが」

「まったくだ。あんた作者なんだろう、もっとしっかりしてくれよ」

「面目ない」

うつむく僕にイワンは言った。

「見せてみるよ」

「えっ？」

「あんたのアイデア帳だよ。いろいろ書いたんだろう？」

「あ、ああ、書いた、けど……」

「どうした」

「そんな、見せられるようなものじゃない」

「いいから見せろって！」

そう言うとイワンは部屋に入り、机の上のノートをパラパラとめくった。

「うわっ、こりゃだめだ」

イワンが大きな声で叫ぶ。穴があったら入りたい気分だった。

「あんた、どういうつもりだ。魔法でも使うつもりなのか」

## イワンの変心

---

「えっ？」

「だってそうだろう。こんな、急に仲よくなるなんてありえない」

イワンが言っているのは、いちばん最後の案だった。いきなり戦争が終わり、人間とクマが仲直りをする  
と書いたのだ。正直、やぶれかぶれだった。

「どうやったら仲よくなれるか、それを考えるんだろう」

僕は頭をかいた。それが分からないから、いっそ魔法で仲よくなればと思ったのに……。

「いいか、俺たちはいがみ合っている。いがみ合う者同士はまず歩み寄らなけりゃならん。いまの俺たちは、それすらできてない。魔法でなんとかかできるレベルじゃないんだ」

わかってるよ……。

「本当の意味で仲直りをしなければダメだ。争いの種が残ってしまう。そのためには、ひとつずつ積み重ねていかなきゃ」

僕はハツとした。イワンの言うとおりで。作者の僕は、ひとつずつ積み重ねていくその過程を書かなければならない。なぜ今まで気付けなかったのだろう。僕はただ情けなくて、大きくため息をついた。

「そう気に病むことはない」

えっ？ 顔を上げると、イワンが僕を見つめている。今までに見たことがないくらい、穏やかな表情だった。

「これはあんたにしかできないことだ。俺たちの誰も、あんたの代わりをすることはできない」

イワンは真剣な顔でそう言った。僕はやっぱり情けない気持ちになった。

「一人で抱え込むことはない。長老はあんたを手伝うために俺たちを指名した。だから思う存分使ってくれよ」

あれ、流れが変わってきたぞ……。

「そりゃあ、言いたいことは色々あるけど、今はそれを言ってる場合じゃないしな」

イワンは頭をかいた。何かあったんだろうか。

「あのあと長老のところへ文句を言いにいったんだ。そうしたら、こっぴどく叱られた」

「叱られた？」

「ああ。お前をチームに入れたのは、お前の能力を買ったからだ。それなのに足を引っ張るとは何事か、ってな」

「そうか……」

「そうまで言われちゃ、俺としても発奮しないわけにはいかない」

そうだったのか。だから、僕の案を見に来てくれたのか。

「まあでも、さっきの案、最終的にそうなりたいという意味ではいいと思うぜ」

僕はちょっと嬉しくなった。イワンと少し分かりあえたような気がしたからだ。

もちろん、イワンの歩み寄りあってのことなのだけれど。 そう、歩み寄りだ。人間とクマの歩み寄り……。

## かおるについて

---

「なあ、イワン。かおるさんのこと、教えてくれないか」

「かおるのこと？」

「彼女はなぜここにいるんだ？」

「人質だからだよ」

「人質？」

「あの女、スパイなんだよ」

「証拠はあるのか」

「いや、ない。だから長老も好きにさせてる。だがどう考えてもスパイとしか思えない」

「どういうことか、詳しく話してくれ」

イワンの話によると、かおるはクマたちが人間に宣戦布告をしたあと、ふらっと現れたという。人間と戦うと決めてから、森の中はもちろん、周辺の見回りも強化していた。その網に引っ掛かったのがかおるだった。見つけたクマによれば、彼女は人間たちが暮らす街の方角からやってきたという。

「な、おかしいだろう」

「うーん、たしかに。怪しいな」

「そうなんだ、怪しいんだよ」

「彼女に事情を聞いたのは、長老一人か」

「いや、ナンシーもいたはずだ」

「ナンシー……」

かおるとナンシーが同じチームなのは、偶然だろうか。

「イワンは、かおるのこと嫌いか」

「何だよ、突然」

「さっきの会合で、かおるはイワンと話したいように見えたんだ。でもイワンは、話したくないようだったから」

「だってあいつ、スパイかもしれないし、それに、うさんくさいじゃないか」

イワンが言うとなんだかとてもおかしくて、思わず笑ってしまった。イワンは少し不満そうに、なんだよ、何がおかしいんだよ、と言ったが、そのうち一緒になって笑いだした。一度笑いだすとなかなか止まらなくて、ひいーおかしい、とか、腹が痛いとか言いながら、ずっと涙を流して笑っていた。

しばらくして、ナンシーとかおるがやってきた。笑いながら、僕たちは二人を冷静に観察した。かおるの視線に感情はなかった。状況を分析し、自分への影響を見極めようとしているようだった。ナンシーは、僕たちを交互に見ながら何があったのか知りたそうにしていた。当然だろう。さっきまでいがみ合っていたのだから。ナンシーの反応が普通なのだ。

かおるが鍵になるかもしれない　僕はそう思った。

## ナンシー、語らず

---

そのあとの会合でも進展はなかった。翌日、僕はどうしてもかおるのことが気になって、イワンとともにナンシーを訪ねた。ナンシーは僕らがそろって現れたのを見て、素直に喜んだ。

「まあ、二人で来るなんて。どういう風の吹き回し？」

「いや、別に大したことじゃ……」

イワンが言うと、ナンシーは目を輝かせて言った。

「昨日から急に仲良くなって、よかったって思ったのよ。さあ入って、お茶入れるわね」

「ああ、いいんだ。ただちょっと聞きたいことがあって……」

イワンはそう言うと、先をどう続けるか迷っているようだった。

「なあに、何を聞きたいの？ 私も聞きたいわ、あなたたちがどうやって仲良くなったのか」

僕とイワンは顔を見合わせた。どちらが続けるか無言の駆け引きをしたあと、肘でつつきあったりは当然したのだけれど、最初にイワンが口を開いたので、僕が言った。

「実は、かおるのことなんだけど……」

そう言ったとたん、ナンシーの笑顔が消え、表情がこわばった。

「ごめんなさい、私の口からは言えないわ」

「なんで？ 何かあるのかい？」

ナンシーはうつむいた。その様子からきっと何かあるのだと思ったが、ナンシーは何も言わない。僕たちはドアのところで無言のまま向かい合っていた。

その状態に耐えかねたイワンがナンシーに近寄り、肩をゆすって言った。

「かおるについて知ることが、この戦いを終わらせる鍵なんだ。頼む、教えてくれ」

「本当にごめんなさい。でも言えないの」

「なんでだよ！ 仲間だろう？」

ナンシーは力なくうなずいた。

「そうだけど……。でも私からは言えないの。長老に聞いてちょうだい」

そう言うと、ナンシーは部屋のドアをバタンと閉めてしまった。

「ナンシー、頼むよ、助けてくれよ」

イワンはドアをドンドンとノックした。

「イワン、やめろ。長老のところへ行こう」

「え、でも……」

「仕方ないだろう。ナンシーがそう言うんだし。それに、かおるとナンシーを同じチームにしたのは長老だ」

「そうか、それもそうだな」

イワンはドア越しに小さな声で、長老のところへ行ってくるよ、と言った。ナンシーに聞こえたかは分からない。僕はイワンの肩をぼんと叩いた。そのときだった。

## ヨハンの事情

---

「ぼくも一緒に行きますよ！」

元気な声に振り向くと、そこにはヨハンがいた。

「ヨハン！ いつの間に……？」

「あなたたちが連れだって出かけるのを見て、気になってあとをつけたんです」

へっ、どうだ、と言いたげなその表情に思わず笑みがこぼれた。そのとき、ある考えが浮かんだ。

「イワン、ちょっと来てくれ」

「な、なんだよ」

イワンの手をひっぱるようにしてヨハンから離れ、小さい声で言った。

「かおるのことを聞きたいと言ったら、ナンシーの表情が変わっただろう」

「ああ」

「ヨハンの姿を見て、それで言うのをやめたんじゃないかと思うんだが……どうだろう」

「なるほど、そうかもしれないな」

「だとすると、ヨハンに聞かせたくない事情があるはずだ。何か心当たりはないか」

「心当たりねえ……」

そう言ってすぐに、あっと叫んだ。

「そうだ、ヨハンの父さんがずっと行方不明なんだ」

「行方不明？ 僕が物語を中断したとき、森の中にいたと聞いたが……」

「ああ、そうだ。人間と戦うことになったとき、ヨハンの父さんは真っ先に出陣した。それから音沙汰がないんだ」

「ふむ。かおるが、その件にかかわっているのかな」

「わからない」 イワンは首を振った。

「それは、長老に聞かなきゃわかりませんよ」

振り向くと、ヨハンがすぐ近くまで来ていた。真剣な顔で僕たちを見ている。

「ヨハン……」 そう言ったきり、言葉が出なかった。

「本当に、いいのか」

イワンが尋ねると、ヨハンはうなずいて言った。

「ぼくには、知る義務があると思います」

こんな小さな子どもが……。僕は胸が痛くなった。

「わかった、一緒に行こう。お前の父さんのこと、一緒に聞いてやるよ」

イワンはヨハンの頭を優しくなでた。二人の間に、僕は見えない絆を感じた。

「行こう、長老のところへ。何があったのか、俺たちは知らなければならない」

僕はうなずいた。

何としても真相を確かめるんだ、この戦いを終わらせるために。



## 長老の部屋で

---

「あすなろです。お話があるんですが」

ドア越しに、中にいるはずの長老に声をかけると、すぐにドアが開いた。開けたのはかおるだった。

「え、かおる……？」

なぜここにいるのか、その質問が喉まで出かかった。それに答えるように、かおるはほほ笑んだ。そしてイワンとヨハンにも。かおるの後ろから長老が言う。

「入りたまえ。イワンとヨハンも一緒にな」

僕はイワンの顔を見た。イワンは僕を促すようにうなずいた。そうだ、真相を聞きに来たのだ。僕も覚悟を決め、かおるに向かってうなずいた。かおるはまたほほ笑み、ドアを大きく開けた。僕たちが入りやすいようにしてくれたのだ。

中へ入ると、ソファに腰かけていた長老が立ち上がった。

「よく来たな。まあそこへ掛けたまえ」

長老が指さしたのは、ソファに向かい合う形で置かれた椅子だった。ちょうど三脚ある。僕たちが訪ねてくるのを知っていたのだ。

「ナンシーから連絡をもらったよ。かおるのことを聞きたいそうだな」

僕は黙ってうなずいた。

「とにかく掛けなさい」

僕たち三人は互いに顔を見合わせながら、ぎこちない動作で腰を下ろした。

「かおる、あれを持ってきてくれ」

「わかりました」

しばらくしてかおるが持ってきたのは、一通の封筒だった。

「あすなろさんに渡しなさい」

かおるはうなずいて、僕に封筒を差し出した。

僕はおずおずと手を出し、封筒を受け取った。

「それは、ヨハンの父親からの手紙だ」

「なんですって？」

僕は驚いた。イワンもヨハンも、声こそ出さなかったが明らかに動揺している。

「ついさっき、ヨハンのお父さんは行方不明だと聞かされたばかりです。それなのになぜ手紙が……。いやそうじゃない、なぜ手紙があるのに行方不明なんですか」

「手紙を読めば、事情が分かるじゃろう。あすなろさん、読んでもらえんか」

「僕がですか？ でもこれは、ヨハンが読むべきものでは」

長老は首をゆっくりと横に振った。

「これは、あんたが読むべきものだ。あんたは、この物語の作者なのだから」

その言葉にハッとした。この手紙には、姿を消した理由が書いてあるのかもしれない。

僕は緊張でごくりと唾を呑みこみ、震える手で封筒を開いた。

## ヨハンの父、カールの手紙

---

「長老、俺はやった。ついに潜入した。人間たちは俺のことを微塵も疑っちゃいない。身の程知らずなクマたちに愛想がつきたと言ったら、すんなり信用された。クマたちのことを知りたければ何でも聞いてくれ、そう言った。だがもちろん、大事なことは何も言いやしない。できるだけ時間を稼ぐつもりだ。だから長老、あとは頼む。ヨハンやイワンによろしくな　カール」

読み終わったあと、僕は手紙をたたんだ。かおるが手を差し出したので、手紙と封筒を渡した。かおるは自分で手紙を封筒に入れ、部屋の奥へ消えた。

ヨハンの父親は自分から姿を消した。行った先は人間たちのところだ。潜入した、そう書いてあった。だが重要なことは何も言わない、とも。クマと人間の戦いはまだ続いている。これだけ武器に差がありながら、人間たちは止めを刺せずにいるのだ。いったいどういうことなのだろう。そのとき、イワンの言葉を思い出した。かおるはスパイなんだ、そう言った。本当にそうなのだろうか？ いや、もしかしたら……。

ある考えが浮かんだ。でも本当にそんなことが……。

「何か思いついたようだな」

長老がにやりと笑って言った。

「何だよ、言ってみろよ」

イワンが僕をせかす。僕は長老をじっと見た。

「この手紙は、かおるさんがここへ来たとき持っていたものです。カールさんから渡されたのでしょうか。違いますか」

「馬鹿な！」

イワンが叫ぶ。だが長老は、にっこりと笑って言った。

「さすがだ。この手紙だけで見抜くとはな」

「いったいどういうことだ。説明してくれよ」

イワンは長老に詰め寄った。ヨハンを見ると、ひどく青ざめた顔をしている。僕はヨハンがかわいそうになった。

「詳しい説明は、あすなるさんにしてもらおう」

「僕ですか？」

そんな、僕は何も知らない。みんなが好き勝手にやっているだけじゃないか。

「さあ、説明してくれたまえ」

「なぜですか、なぜ僕が」

説明しなければならぬのか、言いかけて気付いた。この戦いは、物語を中断したせいで起きたのだ。僕はクマがひどい目にあう、それだけを強調し、その後クマと人間がどうなるか、これっぽっちも考えていなかった。だからこんなことに……。

僕は長老をまっすぐに見た。

「すべては推測にすぎません。間違っていたら訂正してください」

「わかった」長老はうなずいた。

## 作者の気付き

---

ヨハンは相変わらず青い顔をしている。でもその表情には、意思が見てとれた。父親がこの戦争にどうかかわっているか確かめたいという強い意思だ。僕はヨハンの頭をやさしくなでて言った。

「きみの望むような話ではないかもしれないけど、最後まで聞いておくれ」

ヨハンは僕をじっと見て、力強くうなずいた。それからイワンを見た。イワンは一言一句聞きもらすまいと、僕をにらみつけている。必死の形相だった。突然、二人で馬鹿笑いしたことを思い出した。あのときのように、距離が縮まるとは限らない。でも僕は作者として、この戦争、そしてこの物語を、正しい形で終わらせなければならないのだ。

「事態の説明をする前に、ぜひ聞いていただきたいことがあります」

長老はうなずいた。僕はまたゆっくりと深呼吸をして、話し始めた。

「長老はこの前、おっしゃいましたよね。僕が途中で放置してしまったのが原因だと」

「そうじゃ。とくに火あぶりの場面が問題だと、そうお伝えしたはずだな」

「覚えています。あのとき長老は、別のことも言いたかったんですよね」

長老はにっこりと笑った。

「さすが、あすなるさんじゃ」

「正直、僕の力だけでは思いつけませんでした。ワーキングチームを組んでくれたおかげです」

長老はニコニコ笑いながら聞いている。

「なぜ火あぶりにしなければならなかったのかを考えてほしい、そう言いたかったのではないですか」

「いったいどういうことだ。さっぱり分からない」

イワンがたまりかねて声を上げた。長老はイワンを見た。とてもやさしい表情だった。

「あすなるさんの話を一緒に聞こう。なあイワン」

イワンはあ、ああ、と言って黙った。僕は思い切って言った。

「書いたときには意識していなかったのですが、僕は人間を許せなかった。自分も人間なのに、クマをひどい目にあわせる人間に怒りを感じていたし、謝ってほしいとさえ思った。でも、そんな風にして書いた物語が面白いはずないんです。人間はこんなにひどいんですよ、って言われて喜ぶ人間なんかいない。そんなことも分からないくらい、僕は冷静さを失っていました。その結果、こんな戦争が引き起こされてしまった……」

僕はくちびるを噛んだ。悔しい気持ちでいっぱいだった。僕がちゃんと書いてさえいれば……。

「本当に、申し訳ありませんでした」

僕は深々と頭を下げた。

「うむ、それが分かってくればよいのです」

僕は顔を上げた。長老はさっきイワンに見せたのと同じ、とてもやさしい表情をしていた。

## 作者の説明

---

そのやさしい表情に勇気づけられ、僕は考えたことを洗いざらい打ち明けようと決心した。

「僕がクマを火あぶりにしたことで、僕の抱いていた憎しみが、物語の中に広がってしまったのだと思います。とくに人間に対する憎しみや嫌悪感、そういったものが、クマたちのあいだに蔓延していたのではないですか」

長老は目を細め、記憶をたどるようにして言った。

「うむ、たしかにそうじゃった。あのときはみんな、人間に復讐することしか考えておらんかった」

「やっぱり、そうだったのですね。そしてヨハンのお父さんは、この手紙を残して姿を消した。でも独断とは考えにくい。あなたの指示があったのではないですか」

そう言って、僕は長老をまっすぐに見た。長老はまっすぐに僕を見つめ返した。その表情に、ごまかそうという意図は感じられなかった。

「おっしゃるとおりじゃ」

「なんだって！　なんでそんな……ああもう、いったいどうなってるんだ！」

イワンが叫んで頭を抱えた。僕はヨハンをちらっと見た。さっきよりもさらに青い顔をしている。

僕はヨハンの頭をなでた。かわいそうに、長老もからんでいたなんて、仲間が信じられなくなりほしくないかと、案じる気持ちだった。ヨハンは僕を見てにっこりと笑った。

まだ顔面蒼白だが、やはり強い意思を感じる。

きみは本当に強い子だ、そう思って僕はまた頭をなでた。ヨハンは長老の顔を見てほほ笑んだ。

長老もにっこり笑って、そして話し始めた。

「あすなるさんのおっしゃるとおり、われらは今後クマたちがどうするべきか、徹底的に話し合った。それでカールは人間の陣地へと潜入したのだ。目的はふたつある。まずは壊滅的打撃を加えられないようにすること」

「なるほど。だから人間たちは止めを刺そうとしないのか……。こちらにとんでもない隠し玉があると思っているのかもしれないね」

「カールは肝心なことはしゃべらないと、手紙でも約束していた。それを実行しているのじゃよ」

僕はうなずいて、そして言った。

「ふたつ、とおっしゃいましたが、もうひとつは何ですか」

「うむ。こっちの目的のほうがよほど大事じゃった。それは、戦いを長引かせること」

「長引かせる？　いったいなんのためですか」

「あなたを連れてくるためですよ、あすなるさん」

突然背後から声がして振り向くと、かおるがお茶の載ったお盆を持って立っていた。

僕は思わず立ち上がりかけたが、かおるがお盆を持っていないほうの手で制したので、中腰になったあと、ゆっくりと腰を下ろした。かおるは僕たちの前にお茶を置きながら言った。

「あなたをここへ連れてきて、物語を書きなおしてもらうためです。その時間を稼ぐために、私とカールさんは今でも連絡を取り合っています」

## かおるの言い分（１）

---

「やっぱり、お前はスパイだったんだな！」

イワンが立ち上がってかおるにつかみかかろうとした。

「イワン、やめろ！」僕が叫んだとき、イワンの体は宙に浮いていた。そして次の瞬間、どすんと床に落ちた。

何が起こったのか、よく分からなかったが、どうやらかおるが片手でイワンを倒したようだ。

「あいててて……」

「大丈夫か、イワン」

「くそっ。いまいまい奴め」

イワンは悪態をついたが、明らかにダメージを受けている。僕はイワンに、しばらく横になっておいたほうがよさそうだといいかけた。イワンはしぶしぶうなずいた。

お茶を僕たちの前に置くと、長老がかおるに声をかけた。

「かおるもこっちへ来なさい。話したいことがあるんじゃないか」

かおるは少し躊躇したように見えたが、すぐにうなずいて言った。

「はい、では失礼して……」

ここで見る限り、かおるはとてもしっかりした女性に見えた。ワーキングチームで何を考えているか分からないようにふるまっていたのは、わざとだったのだろうか……？

「私は、前からカールさんとは知り合いだったのです」

「なんだって！」

イワンは上半身を起こして叫び、背中への痛みで顔をゆがめた。

僕はふと思いついたことがあり、それを口にした。

「あなたも、鈴を返してくれと言われたのですか」

かおるはうなずいて言った。

「そうです。あのお話のとおり、カールさんと森の中で知り合いました。鈴を返した私を、カールさんは家に招待してくれました」

「そのとき、ヨハンには会いましたか」

「いいえ、会えませんでした。でも、写真を見せてもらいました」

「写真ですか」

「ええ。ヨハンとカールさんと、それからカールさんのお父さんが写っている写真です」

胸がずきんと痛んだ。僕が火あぶりにしてしまったクマだ。

「カールさんは、お父さんのことを……？」

かおるはうなずいた。

「人間に火あぶりにされたと言っていました。でもカールさんから憎しみは感じられず、むしろ悲壮な決意が現れているように思いました」

「それについて、カールさんは何か言っていましたか」

## かおるの言い分（２）

---

「はい。自分たちクマは、これから人間と戦争をずっとしていました。だから森の近くにはいけない、遠くへ逃げなさいと言われてました」

「でもあなたは拒否した」

「はい。私もあすなろさんと同じで、人間がクマを迫害するのは許せないと感じていました。だから、何でもいいので手伝わせてほしいと言ったのです。そうしたら」

「そうしたら、長老に会わせてもらえた……」

「そうです。長老と会って、計画を聞かされました」

「でもなぜ、あなたは人間なのに手伝えたのでしょうか。疑問に思いませんでしたか」

「実は……」

そう言ってかおるはうつむいた。言うべきかどうか、迷っているようだった。

「何か、心当たりがあるのですね」

かおるはうなずくと、僕を見て言った。

「この戦いで人間側の指揮をとっているのは、私の父なのです」

「なんだって！」

僕たちはまた一様に驚いた。これはさすがに作者の僕も想定していなかった。そうだったのか……。

「父からもクマを火あぶりにしたことを聞いていました。なんてひどいことを、と私が言うと、仕方ないのだ、と父は言いました。人間たちの怒りを吐き出させ、うまく収めるには犠牲が必要なのだと。私は父を許せなくて、それで森へ行ったのです」

「クマたちに謝るため、ですか？」

「よく分かりません。でもとにかく森へ行って、クマたちに会いたかった。鈴を返すのも理由と言うより、口実だったかもしれません。クマたちに会いたい、会わなければならない、そう思ったのです」

僕はうなずいた。たとえ八つ裂きにされようとも、かおるはクマに会わなければならないと思った。その気持ちは痛いほど分かった。

「お前はさっき、カールから憎しみを感じなかったと言ったな」

かおるは顔をあげ、イワンを見てうなずいた。

「でも、父親を火あぶりにされて憎しみを持たないなんて、俺には考えられない」

「イワン、何が言いたいんだ。かおるがウソを言っているというのか」

「そうじゃない。そうじゃないが、どうしても信じられないんだ。だってカールは、父親が火あぶりにされたとき、あんなに泣き叫んでいたんだから」

イワンは泣いていた。長老はイワンのそばへ歩み寄り、その肩をやさしく抱いた。

「その気持ちはよく分かります」

かおるが言った。とても穏やかな表情だった。

「カールさんは、憎しみを連鎖させてはいけないと言いました。だから息子のヨハンには、この計画は内緒だと」

## かおるの言い分（3）

---

「内緒ってなんだよ！ ヨハンがどんなに辛い思いをしているか、お前に分かるのかよ！」

「イワン、やめる。かおるのせいじゃない」

「だって、だってひどいじゃないか。あんまりだよ。ヨハンをなんだと思ってるんだよ」

あんまりだ。ひどすぎる。そう言いながら、イワンは泣いた。

ふと、僕は服のすそに重みを感じた。ヨハンだった。相変わらず青い顔をしていたが、何かを言いたそうにしている。

「ヨハン、どうした」

ヨハンは小さな声で言った。

「ぼく、怒ってないよ。かおるさんのこと、怒ってないよ」

それを聞くと、かおるは声をあげて泣き出してしまった。イワンは驚いて泣きやんだ。

泣きながら、かおるはヨハンに礼を言った。

「ありがとう……本当にありがとう」

やっと心の重しがとれたと言いたげな、清々しい表情だった。

「カールさんが来たとき、私は父の秘書として人間の陣営にいました」

「なるほど。それで、カールさんを尋問したのですか」

「私は立ち会っただけです。尋問は父が行ないました」

「ほう、総司令官みずから」

「ええ。父も疑っていたのだと思います」

「そうですか……」僕はあごをなでながら、今後どうすべきかを考えていた。

「かおるさん」 ヨハンが呼びかけた。

「ぼくも、聞いていいですか」

「ええ、いいですとも。なんですか？」

「ぼくのお父さんは、いま何をしていますのですか」

「あなたのお父さんは、戦争の行方を左右する重要な地位にいます。ほかにも二人、同じ地位についている人間がいます。三人で作戦を立てたり攻撃命令をしたりしているのです」

「と、いうことは」僕はまたあごをなでた。

「総司令官は、全面的にカールさんを信頼しているわけではないのですね」

「残念ながら、そのとおりです。ほかの二人は、監視役も兼ねています」

「ううむ」僕は腕組みをした。

「でも」イワンが体を起こしながら言った。

「かおるがいるのに攻撃してくるのはなぜだ。皆、かおるがここにいることを知らないんじゃないのか」

それを聞いてかおるはとても苦しそうな表情になった。 もしや……。

「もしかしてあなたは、総司令官に言われてここへ来たのではないですか」

僕がそう言うと、かおるの表情は苦悶でさらにゆがんだ。

## かおるの言い分（４）

---

「おっしゃるとおりです」

「なんだって！」 イワンが飛び起きた。

「やっぱり、やっぱりお前はスパイだったんじゃないか！」

イワンは興奮して叫んだ。かおるはうつむいて何も言わなかった。

「イワン、落ち着け。 かおるはスパイじゃない。クマ側に不利な情報は渡していないんだ」

「どういうことだ」

「人間が求める情報を流しているようで、実際はクマ側に都合のいい情報しか流していない。協力者がいれば口裏を合わせられるから、発覚する確率はおそろしく低い」

イワンはしばらく考えて言った。

「じゃあ、かおるはこっちの味方なのか」

「まあ、そういうことだな」

そうですね、と僕はかおると、その隣の長老を見て尋ねた。二人は同時にうなずいた。

「そのとおり。さすがはあすなるさんじゃ」

長老は満足そうに、にこにこしながら言った。自分の読みがあたったのは嬉しかったが、喜んではいけない。

「ということは……」

僕は誰に言うともなくつぶやいた。自分自身に対してまとめをしているつもりだった。

「総司令官はカールさんを信用していないから、かおるさんを送りこんだ。カールさんが言っていることが正しいかどうか、かおるさんに調べさせるつもりだった」

かおるがうなずいた。

「総司令官に話したことをカールさんから聞き出せれば、これは本当かと聞かれたとき、間違いのない、たしかにそうだと言える。総司令官は、かおるさんとカールさんが通じていることは知らない」

長老が大きくうなずいた。

「そうやって二人で連絡をとりあって、壊滅的打撃を加えられないようにしてきた、ということか……」

かおるが弾んだ声で言った。

「ええ、そのとおりです。本当にさすがですね、あすなるさん」

かおるに言われると、またちょっと違った気分だった。人間の女性にほめられるのはやはり格別だ。

そんな僕の思いを見透かしたのか、イワンが冷たい目で見ている。僕はあわてて言った。

「では改めて整理します。そういう状況の中、僕が呼ばれたということは」

ここで僕は、一度咳払いをした。

「今までにない新しい策が必要、ということでしょうか」

長老がうなずいた。

「さよう。総司令官はかおるのことも怪しみだしたんじゃない。早急に何とかしなければならん」

「えっ、でも実の父親ですよ」



## そこにある「危機」

---

「戦争とはそういうもんじゃ。親子であろうとなかろうと、怪しい者はみな敵なんじゃよ」

そんな……。

「父は近く総攻撃を仕掛けると言ってきました。もうこれまでと同じ方法をとることはできません。いったいどうすれば……」

「総攻撃？ それはいつですか」

「昨日、一週間後と言われました」

あと六日……。

「カールさんと最後に連絡を取ったのは？」

「四日前です」

「四日前、というのは僕がここへ来る直前ですね」

「はい。カールさんのところへやった小鳥が戻ってきて、とくに変わったことはないが少し不穏な空気を感じると、そう教えてくれました」

「それ以降、何も連絡がないのですか」

「はい。私に連絡しようと思えば、いくらでも伝言する手段はあります。それなのに、何も言ってこないなんて」

「いま、小鳥をやったと言いましたね。いつも小鳥で連絡しているのですか」

「最近はそうです。最初はあぶり出しの手紙だったのですが、怪しまれ始めたので、小鳥を使うことにしたのです」

「そうですか……」

僕は腕組みをした。予想したより状態が悪いのかもしれない。カールと連絡が取れないのが最大の問題だった。それはつまり彼の身が危ないということだ。総司令官はかおるたちの関係に気づいたのではないが。だからカールを監禁して、かおるに総攻撃を仕掛けると連絡してきた。

もしかすると、カールはもう生きていないかもしれない。突然浮かんだその考えを、僕は必死で打ち消した。そんなはずはない。そこまで人間が逆上するとは思えなかった。もちろん僕の希望的観測であり、実際どうなっているかは分からない。だが作者としては、カールに生きていてほしかった。

「あの……」

ヨハンがおずおずと言った。みんながヨハンを見る。

「小鳥って、あのお話の小鳥ですか」

「ええ、そうです。ごめんなさい、ちゃんと言うべきでしたね」

かおるはにっこりほほ笑んだ。ヨハンはホッとしたようにうなずいた。

そう、森で待っていた旅人に、三羽の小鳥がそれぞれ知らせにいった。あんな風に、向こうへ知らせにいったのだろう。そのとき、ある考えが浮かんだ。こんなときになぜ、と僕自身思ったが、どうしても聞かずにはいられなかった。

「長老、どうしても聞いておきたいことがあるんです。こんなときに何を、と思われるかもしれませんが」

「かまわんです。何でも言ってください」

「かおるさんとナンシーを一緒にチームにしたのは、いったいどういうわけですか」

「何言ってるんだ！ そんなこと聞いている場合じゃないだろう！」

イワンは激昂した。もっともな反応だ。僕がイワンの立場でも、やっぱり怒っただろう。でもなぜだか、どうしても聞かなければいけない気がしたのだ。長老は目を閉じたまま、何も言わなかった。やはり聞くべきではなかったのだろうか。僕の勘違いだったのか.....。

「それは、私からお答えします」

声のした方を見ると、かおるがにっこり笑っている。

「ナンシーは、イワンと私が仲よくなりたいと思っているんです。カールさんもきっとそう望んでいるはずだと、ナンシーは言っていました」

「ナンシーが？ いったい、どういうことですか」

「イワンのご両親は早くに亡くなって、ヨハンとは兄弟同然に育ったそうです。カールさんは二人を同じようにかわいがっていたと、ナンシーから聞きました」

そうだったのか.....。これも想定していなかったが、気付くべきだった。長老の部屋へ来る前、イワンがヨハンを思いやっていたあの態度。二人の絆は、とても他人同士とは思えなかった。

「ナンシーのやつ、余計なこと言いやがって」

イワンはふいと横を向き、悪態をついた。でもその表情は穏やかで、優しさがにじみ出ているように思えた。カールの言葉がよみがえる。憎しみを連鎖させてはいけない。

そうなのだ。かおるのように、クマのことを真剣に考える人間がいることを、カールは嬉しく思ったに違いない。きっと何か方法があるはずだ。戦争が終わったあと、人間とクマが仲よく暮らせるような方法が.....。

「そうだ！」 僕は膝を打った。

全員の視線を浴び、はやる気持ちを抑えながら僕は言った。

「交換するんです、かおるさんと、カールさんを」

「交換？」

「そう。お互い、相手陣営には人質にとられていることになってると思うんです。カールさんは『行方不明』ですが、実は人質にとられていたことにして、戦争が長引くのを避けたかったとか、何かそういう理由で隠していたことにすればいい」

「人質交換、ねえ.....」 イワンがひとり言のように言った。

「それは、なんのためですか」 かおるが尋ねた。

「歩み寄りですよ、歩み寄り」

「歩み寄り？」

「そうです。和解への第一歩です。なあ、イワン」

僕が声をかけると、イワンはああ、と言って笑顔を見せた。

## 歩み寄り作戦

---

数日後、僕の作戦は実行に移されることとなった。

かおるは緊張していた。当然だろう。彼女は重要な役割を負っているのだ。

僕は長老の部屋で披露した作戦を思い返した。

「かおるさんは総司令官の娘です。かおるさんを取り戻したら、向こうは本当に総攻撃を仕掛けてくるかもしれせん」

「なんだ、それじゃあ意味がない」

イワンはそう言ったが、僕はにっこり笑って言った。

「だから、そこからがかおるさんの本当の出番です」

「私の出番？」

「ええ。クマたちには本当によくしてもらった、人質とは言っていたが、待遇はとても素晴らしかった。あのクマたちを攻撃するなんて罰当たりなことはやめてほしい、そう訴えるんです」

「うまくいくでしょうか」

「もちろん、すぐにうまくいくわけじゃあないでしょう。もしかしたら、牢屋に入れられるかも」

「ええっ？」ヨハンが叫んだ。その顔は恐怖にゆがんでいる。

僕はまたヨハンの頭をなでて言った。

「でも、そう訴える娘を牢屋に入れたら、人々はどう思うのでしょうか。単にクマを攻撃する口実がほしいんじゃないか、そう考えるかもしれない」

「なるほど」イワンは納得したようだった。

「そこで、長老が和睦を呼び掛けるのです」

「ほう、わしの出番か」

「ええ。カールさんもとても待遇がよかったと言っていた。こちらの様子を探る意味もあったかもしれないが、戦いの行方を左右する地位にまでつけてもらったことには感謝している。これまでのことは水に流して、お互い手を取り合おうと言うんです」

「たしかに、そう言っているクマを攻撃したら、人間の風上にもおけないな」

イワンがそう言うと、ヨハンもうん、うん、とうなずいた。

「その交渉の際、土産をもっていかなくてはなりません」

「土産？ それは、どんぐりのことかね」

「いえ、食べるものではありません。いまは戦争状態だからできないけれど、かつて人間が森のなかで楽しんでいたことがありましたよね。和睦してそれをできるようにする、と言うんです」

僕としては分かりやすく言ったつもりだったが伝わらなかったようで、みんな頭をひねっている。それで僕は最高のヒントを出した。

「思い出してください。かおるさんは森の中でカールさんに会い、鈴を返してくれと言われました。それは、何をしているときだったでしょうか」

## 歩み寄り作戦（２）

---

「散策！」

かおるが叫んだ。

「そう、散策です。人間は森林浴が好きなんです。クマが和睦して森を解放すると言ってきたら、もろ手を挙げて和睦に賛成しますよ」

かおるが言った。

「素晴らしいです、さすがあすなろさんですね」

いやいや、と僕は言った。実際、これにはまだ続きがあった。

「ポイントは、密室でやってはいけないということです」

「ああ、そうか。密室で会合したら、森を解放する話ともみ消されてしまう」

「そのとおり。さすがだな、イワン」

イワンは大したことはない、と言ったが、まんざらでもなさそうだった。

「じゃあ、こうすればどうでしょう」

みんながヨハンを見た。

「人間の好きなテレビを使うんです」

「テレビ！ それはいい考えだわ」

まったく同感だった。クマたちもうなずいている。いつの間にかみんなが輪になって、お互いの距離が近づいていた。

「よし、じゃあこれで決まりですね」

僕が言うと、誰に言われたわけでもなく、一人ずつ右手を円の中央に出した。

僕もみんなと手を重ねた。イワンが言う。

「カールと、かおるのために」

さっきまでかおるを目のかたきにしていたのがウソのようだ。

みんなの視線を感じてか、イワンは照れくさそうにぷい、と横を向いた。そんなところもイワンらしい。

僕はイワンのせりふをくり返した。「カールと、かおるのために」

それをみんなが復唱する。「カールと、かおるのために」

ここへ来てはじめて、みんなと心がひとつになった。

そう思うと、僕はとても嬉しかった。

それから数日後の今日、晴れて作戦決行となったのだ。

両陣営からの距離を考え、人質交換は原っぱで行なわれることになった。あの放置されたお話の中で、旅人がクマと出会った場所だ。かおるの父である総司令官は、人質交換の提案をすんなり受け入れた。場所が場所だけに、本当は嫌だったかもしれない。でも私情を挟んでいないと思わせるあたりはさすがだ。素直に彼を誉めるべきだろう。万一作戦がうまくいかなかったら、作者の僕が出て行って事態を打開しなければならない。この総司令官が相手なら、うまい落としどころを見つけられるんじゃないか。僕はそう思っていた。

いざ！

---

僕たちは原っぱにテントを張り、そこにかおるの父、総司令官が来るのを待っていた。総司令官はカールを連れてくるはずだ。向こうも二人だから、と長老が一緒に行こうとしたがかおるは拒み、結局、かおるが一人で行くことになった。イワンがまたスパイ疑惑を持ちだすのではないかと思ったが、気をつけると言っただけだった。

人間の陣営も僕らから見えるところにテントを張っている。中の様子までは分からないが、少なくとも見える範囲では、おたがい正々堂々とこの場に臨んでいるはずだった。

テレビカメラはどこにいるのか分からない。人間の背丈ほどの草が生い茂っているのも、見えないのかもしれない。テレビカメラは人間側が手配することになっていた。僕は一抹の不安を感じたが、かおるが大丈夫と言うので信用することにした。イワンも何も言わなかった。

僕は背中側、ズボンに挟んだノートを取り出した。 昨晚寝る前に、これまでの出来事を書いておいたのだ。あとは終わらせるだけだ。計画どおりいなくても、「どうなってほしいか」を書きこむ予定だ。書いたことはきっと実現するし、それが物語の終焉へとつながっていく、そう信じている。

「いよいよだな」イワンが声をかけてきた。

「ああ」

「そのノート、なくすなよ。大事な切り札だからな」

「分かってるさ」

僕は笑みを見せた。

「そうだ、さっき思ったんだが」

イワンは興味深そうに僕を見た。

「本当にまずいときには、僕が出て行って総司令官と話すよ。かおるにそう伝えてくれないか」

「分かった」

そう言ったあと、イワンの表情が緩んだ。

「あんたもずいぶんそれらしくなったな」

「え？」

「作者らしいってことだよ」

「あ、ああ」

僕はどう反応していいか分からず、ただ頭をかいた。イワンは僕の肩をぼんと叩いた。

「よろしく頼むぜ、作者さん」

その言葉には信頼がこめられていた。そうだ、堂々としていればいい。僕は作者なのだから！

「来たぞ！ 総司令官だ」

クマたちの声がした。いよいよだ。僕は深呼吸をした。かおるはテントの出入口のところに立って、イワンと話している。さっきの伝言かもしれない。イワンが去ってすぐ、かおるが振り向いた。僕は息が止まりそうになった。まずい、かおるを行かせてはいけない。

## かおるの覚悟

---

「止める！ かおるは死ぬ気だ！」

それを聞いてクマたちはざわついた。僕はかおるを止めようと、出入り口へ走っていかうとした。でもクマたちに阻まれ、思うように進めない。このときかおるは外へ出ていたから、止めるのは無理だったろう。でも僕には、テントの中で待っているなんてできなかった。

「どうした。いったいなんの騒ぎだ」

イワンの声がした。僕は叫んだ。

「イワン、かおるを止めてくれ！ 人質交換は中止だ！」

「なんだって？」

「頼む、頼むからかおるを……」

そこまで言ったあと、僕はハッと気づいてノートを取り出した。そうだ、これに書けばいいんだ。

「やめなされ！ ノートに書いてはならん！」

振り向くと、長老がものすごい形相で立っていた。隣には、いつの間にかイワンが立っている。長老の迫力に気圧され、クマたちが道を開ける。二人は僕のところへやってきた。

「かおるの覚悟を無駄にしてはなりません」

「かおるの、覚悟？」

「そうです。おっしゃる通り、かおるは死を覚悟しています。だがそれはけじめなのです」

「けじめ……？」

「さよう。向こうの総司令官を父に持つ人間として、かおるなりに考えた結果です。どうか、ご理解いただきたい」

長老は、僕がここへ来たときと同じように頭を下げた。クマたちのあいだから、ため息がもれた。

「あんたは物語を終わらせる。かおるはその手掛かりをくれる」

イワンがそう言って差し出したのは、イヤホンだった。

「なんだ、これは」

「つけてみるよ」

言われるまま右耳に差し込むと、かおるの声がした。

驚きに目を見張る僕に、イワンはにっこり笑って言った。

「かおるのスカーフにマイクがついていて、会話が聞こえるようになっている。かおるはあんたに託したんだよ」

僕に、託した……？

さっきのかおるの様子を思い出した。たしかに覚悟を決めていた。総司令官と刺し違えることもいとわない、そんな顔だった。

イヤホンを通してかおるの声が聞こえる。お父さんやめて、考え直して、そう言っていた。

いったい、何が起きているのだろう。僕は二人の会話に聞き入った。

## カールの不在

---

「なぜそんなことを言うのだ。母さんがどんな目に遭ったか、忘れたわけではあるまい」

母さん？ かおるの母親のことか。

「もちろんよ。忘れるものですか。でも、それとこれとは話が別よ」

「別なものか。母さんの敵をとるため、父さんは総司令官になったのだ。その最大のチャンスを棒に振るなど、できるわけがないだろう」

敵をとる……？ 母親はもしや、クマにひどい目に遭わされたのだろうか？

「お願い、考え直して。私やカールさんは、そこから抜け出したのよ。お父さんにだって、できるはずだわ」  
やはりそうだ。そうに違いない。

だが総司令官は気になることを言った。最大のチャンス、とはどういうことだろう。

僕は考えながら、様子を見守るクマたちに向かって言った。

「かおるは総司令官と話していますが……何か、差し迫った事態が起きているようです」

イワンが息をのんだ。長老は目を閉じている。全神経を研ぎ澄ませているようだった。

「ねえ父さん、カールさんはどこにいるの」

僕はハッとした。そういえば、総司令官が来たとは聞いたが……。

「今ごろ、やつは向こうのテントでくたばってるさ」

「どういうこと？ 一緒に来る約束でしょ」

「約束だと？ そんなものにいったい何の意味がある。クマの言うことなど聞けるか！」

僕は鳥肌が立った。

カールはテントでくたばってる、総司令官はたしかにそう言ったのだ。

「カールさんに何をしたの。教えて、お願いだから！」

「何もしてやしない。ただ手足を縛って放置しただけだ」

「そんな！」

僕はたまらずイヤホンを外した。

「カールさんが危ない。誰か、向こうのテントへ行けないか」

「なんだって？ どういうことだ」 イワンが尋ねた。

「カールさんは手足を縛られて、テントに放置されているらしい」

「なんと……！」

長老が目を見開いた。

「それはゆゆしき事態じゃ。小鳥たちを呼べ。ネズミもじゃ。全員でカールを救い出せ」

「はい！」

クマたちが裏口からばたばたと出ていった。

## 戦いの行方：混沌

---

「長老、総司令官が言っていたことなんですが」

ん？ という表情で長老が僕を見た。

「かおるの母が、クマにひどい目に遭わされたようなんです。その敵をとるために自分は総司令官になった、そう言っていました。いったい、どういうことなんでしょう」

長老はしばらく考えたあと、ぽつりと言った。

「それは、あなたにも関係のあることですか、あすなるさん」

「僕に？ どういうことですか」

「覚えはありませんかな。あなたがこれまで書かれたお話のなかに、そういうものがあったはずじゃ」

「僕がこれまで書いたお話の中に、ですか」

長老はうなずいた。少し考えてみたが、まったく覚えがない。

「いや、ありません」

「そんなことはない。あるはずですよ。よく考えてみなされ」

そんな……。いきなりそんなこと言われても……。

「おい、これを聞いてくれないか」

イヤホンを耳にあてていたイワンが言った。

僕はイヤホンを受け取り、もう一度二人の会話に耳を傾けた。

「お願い、やめて！ そんな物騒なものを、捨ててちょうだい！」

「いいや、やめるものか。お前がどうしてもクマの味方をすると言うなら、皆殺しにするまでだ」

何だって？ 皆殺し？

「向こうにも、クマの陣営にも爆弾を仕掛けた。お前の好きなクマたちも木っば微塵だ！」

木っば微塵だと！？

僕はクマたちに言った。

「総司令官は爆弾を仕掛けたと言っています。こちらにも、それから向こうにも」

クマたちは大騒ぎになった。当然だ。どこに爆弾があるか分からないのだから。

イワンも顔が真っ青になっている。だが長老は冷静だった。

騒ぐな、とクマたちを一喝すると、不審な荷物があつたかとイワンに尋ねた。イワンはハッとした。

「そういえば、昨日テレビ局から届けものがあった」

「テレビ局から？」

「ああ。ナンシーが受け取ったんだが、小包で、当日まで開けるなと書かれていて……」

言いながら、イワンの顔色がどんどん白くなっていく。

「まさか……まさかあれが……？」

イワンは汗をかいていた。信じられない、ウソだろ、としきりに言っている。

僕もまったく同じ気持ちだった。爆弾まで仕掛けるなんて、いったい総司令官はどういうつもりなのだ。



## 戦いの行方：ひと筋の光

---

さっきまで話が通じるかもしれないと思っていたが、もう直接交渉などしたくなかった。

だが僕は作者だ。この戦いを終わらせなければならない。どうすればいいのか。

「ナンシーを呼べ。それから昨日届いた小包を破棄しろ。できるだけ遠くの、生き物のいないところへ捨てるんだ、いいな」

長老は相変わらずてきぱきと指示を出している。

間もなくナンシーがやってきた。荷物の大きさや外観などを伝えると、それを聞いたクマたちはまた裏口から出ていった。

ナンシーは僕とイワンを見た。とても不安そうだった。いったいこの戦いはどうなってしまうのだろう。

いったん見えたと思った出口が、また見えなくなってしまった。

僕はふと、カールを助けに行った連中のことが気になった。

「長老、向こうへ行った人たちは大丈夫でしょうか」

「それは分かりませんな」

「分からない？」

「総司令官が起爆装置を押せば、一巻の終わりです。かおるが時間を稼いでくれるのを祈るしかないでしょうな」

「そんな……」

その答えに僕は納得できなかった。作者である僕が努力を放棄してはいけないのは分かる。

だが僕の努力が生きるのは、長老をはじめ、キャラクターたちの協力あってこそだ。

それなのに自分は知らないと言われたようで、思わず、無責任だ、と強い口調で言ってしまった。

「無責任ですと？」長老はむっとしたように言った。後悔したが、口から出た言葉は取り返せない。

「我々は最善の努力をしております。あなたこそ、よくお考えになったらいかがかな」

長老の言うとおりであった。

さっきも長老から、僕が前に書いたお話に関係があると言われたではないか。それなのに。

僕はまたイヤホンを耳につけた。総司令官の声がした。

「お前がああとき、クマの額から銃弾を取り出したりしなければ……」

クマの額から、銃弾を取り出す……？

その言葉は、僕に何かを伝えていた。だが何を伝えているかが分からない。肝心なところがぼやけている。

僕はさらに耳を傾けた。

「いや、クマが我々の団らんを覗いていたときに、何とかすればよかったのだ。もっと早く、猟銃を持ち出していれば……」

クマが、団らんを覗く。猟銃を持ち出す……。そのとき、光が見えた。

そうか、そうだったのか。

あれが、かおるの家族だったに違いない。たしかに僕が書いたお話だ。なぜ忘れていたのだろう。

あのお話を放置していたのが、そもそもの原因だったのだ。

## 本当の原因

---

そのお話は、こんな内容だった。

森の中のある家に、人間の家族が住みついた。夫婦と娘の三人家族だった。森の生き物たちは三人と友達になりたかった。でも父は交流を避けていた。母と娘はせっかく森にいるのだし、仲良くしたいと考えていた。だから森の生き物たちと出会ったら挨拶もしたし、ときには会話もした。母と娘は、「森の住人」になっていったのだ。

そんなとき、一頭のクマが娘と仲良くなった。娘はクマに、家にあそびにきてほしいと言った。クマは最初遠慮していたが、熱心に娘が誘ってくれるのでよばれることにした。自分は外から見ているので、入っても大丈夫そうなら合図してほしい、そう言った。娘は快く承知した。

その日、人間の家族は団らんの最中だった。娘は窓の外を見ながら会話に興じていた。クマがやってきたのを見て、今なら大丈夫と思い、クマに合図をした。

クマはドアを開けた。「すみません、おじゃまします」父と母は驚いた。でも母は嬉しそうにクマを招き入れ、自分の隣に座らせた。それが父には面白くなかった。だからクマに帰れと言った。クマは立ち上がり、帰ろうとしたが、娘が止めた。それもまた、父の神経を逆撫でした。

父は部屋の隅にある猟銃を取った。クマは驚いた。「やめてください」母は叫び、父から銃を取り上げようとした。二人がもみ合ううち、銃口は母に向けられた。「危ない！」クマが叫んで手を出した。そのとき、クマの手が母に当たった。母はクマの爪に傷つき、胸に重傷を負った。もちろん傷つける意図はなかった。父は逆上し、クマに向かって発砲した。

銃弾はクマの額に当たり、そこに留まった。傷口から血が流れている。クマは逃げ出した。父は母を抱きかかえ、しきりにその名を呼んだ。娘は家の外へ出て、クマのあとを追いかけた。

「クマさん、待って」娘は叫んだ。「そんな傷を負ったままでは死んでしまうわ」

クマは立ち止まった。娘はクマの額から銃弾を取り出すと、傷口の手当てをした。

「これでもう大丈夫」

そのあと、娘はクマに詫びた。

「ごめんなさい。私がちゃんとお父さんに言ってなかったから」

「私のほうこそ、お母さんを傷つけてしまって申し訳ありません。お二人によろしく」

そう言うと、クマは森の奥へと消えていった。

五年前に書いたものだ。続きはない。どこにも発表せず、しまい込んでいた。「娘」はかおるで、「父」が総司令官なのだ。クマはどうだろう。額に傷を負ったクマ……。 そうだ。あのお話で、旅人と話したクマが言っていたじゃないか。父親の額には三日月の模様があると。あれは銃創だったのだ。

この話をきっかけに、総司令官はクマへの憎悪を抱くようになった。ずっと妻の復讐を考えていたに違いない。額に模様のあるクマを銃殺し、その子どもを火あぶりにした。カールのことも、妻を傷つけたクマの孫と知っていたのではないか。

僕は圧倒されていた。火あぶりにしたり、銃で撃ったり、どちらも深く考えずにしてしまった。とくに銃で撃つほうは、未発表の作品だ。クマと人間の因縁がここから始まったなんて、いや、始まるなんて、本当に考えてもいなかった。

いつの間にか、テントの中が騒がしくなっている。見ると、クマたちが出入り口のあたりに集まっていた。何事かと思っていると、しきりに「おかえりなさい」と声がする。もしや、カールが帰ってきたのか？

僕は移動して外を見た。誰もいない。クマたちは上を見ている。僕も見上げて驚いた。大きなクマが、小鳥たちに運ばれてきたではないか。驚いて、ぽかんと口を開けたまま見ていた。たしかに小鳥たちを呼べ、と長老は言っていたけれど……。まさか、こんなことのためだったなんて……。

クマがテントの出入口付近に降り立ったとき、長老が前に歩み出た。クマは小鳥たちを放してやった。体格のいい立派なクマだ。顔はどこことなくヨハンに似ている。やはりカールに違いない。

握手を交わした長老は、ねぎらうように肩を叩いて言った。

「カール、ご苦労じゃった。世話をかけてすまん」

「謝るのは僕のほうです。僕の力が及ばず、戦いを終わらせられなかった。本当に残念です」

カールの言葉が胸に突き刺さる。

そのとき、長老の言葉がよみがえった。クマを火あぶりにする場面で自分たちのことを考えてくれたら、と長老は言った。それはつまり、物語世界で暮らす我々のことを考えてほしかった、そういうことではないか。イワンも言っていた。魔法ではダメなんだと。魔法で戦いが終わっても、争いの種は残るから、と。ではどうすればいい？ どうすれば、物語世界に住むクマや人間たちが、本当の平和を手にするのだろうか。

「紹介しよう。作者のあすなるさんじゃ」

顔を上げると、カールが中へ入ってきたところだった。カールは僕のところへ来て、にっこり笑った。

「はじめまして、あすなるさん」

カールの笑顔がまぶしい。僕はへっぴり腰でお辞儀をして、はじめましてと言うのが精いっぱいだった。カールは僕の手をとった。

「このたびは、ご面倒をおかけしています」

「そんな！」

僕が叫ぶと、カールは不思議そうな顔をした。

「あ、いや、その……」僕は言葉を探した。

「お父さんのこと、申し訳ありませんでした。それから、お祖父さんのことも」

僕がそう言うと、カールはうなずいた。

そのとき、あとから出ていったクマたちが戻ってきた。爆弾の処理に向かった連中だ。迎えたクマたちは彼らをねぎらい、よくやった、御苦労さまと言っている。クマたちの喜んでいる顔を見て、胸がいっぱいになった。みんなの笑顔がまぶしい。この笑顔が失われることのないよう、僕は配慮すべきだったのだ。

## 終焉に向けて

---

遠くで爆発音がした。それも立てつづけに二度。よかった……。クマたちも、それから人間たちも、爆弾で傷つかずにすんだ。僕は心からホッとした。

「なんだ、いまの音は」

突然、総司令官の声がした。テントの奥にあるテーブルにスピーカーが置かれ、そこから声がしている。

「イヤホンを外して、スピーカーにつないだんだ。みんなで聞けるほうがいいだろう」

得意げなイワンに、僕はにっこり笑ってうなずいた。

「みんなで聞ける？」

カールに問われ、かおるのスカーフにマイクがついていることを説明した。

「ああ、なるほど」

カールはテーブルのほうへ歩み寄り、スピーカーに耳を傾けている。僕と長老もスピーカーの近くへ移動した。

「なぜうまくいかないのだ。かおる、お前のせいだ。お前が裏切ったのか」

総司令官の声には焦りがあった。

「お父さん、落ち着いて。誰も裏切ってなんかいないわ」

「ウソをつけ。カールと連絡をとりあって口裏を合わせていただろう。知っているんだぞ」

かおるが息を呑む。僕も緊張した。総司令官は、本当に全部知っているのではないか？

「まずいですね」カールが言うと、長老もうなずいた。そのとき、バシッという音がした。

「痛い！」

「母親をあんな目に遭わされていながら、なぜクマの味方をするのだ。答えろ、かおる！」

そしてまたバシッという音がした。まさか、総司令官はかおるを叩いているのか？

「さあ言え、なぜだ」

「やめてお願い。そんなお父さんを見たら、お母さんだって喜ばないわ」

「こしゃくな！ お前に何が分かる！ このスカーフだって、連中につけさせられたんだらう。知恵で私に勝とうなんて百年早い！」

次の瞬間、ものすごい雑音がして思わず耳をふさいだ。しばらくして手を離すと、スピーカーからは何も聞こえない。マイクがスカーフごと外されたようだ。まずい、何とかしなくては……。

「僕が行きましょう」カールが言った。「総司令官を説得してきます」

僕は迷った。カールが行ったら、さらに逆上させるのではないか。やはり僕が行くべきか。でも総司令官が僕の言うことを聞くとは思えない。いったいどうすれば……。

テーブルの上に、持ってきたノートがあった。さっきはここに、人質交換中止と書こうとした。いま書くべきなのはあの続きだ。そもそもの発端となった、五年前の話。

顔を上げ、長老に言った。

「いま、ここで戦いを終わらせます」

長老は大きくうなずいた。

「カールさん、外へ出るのは書き終わってからにしてください。お願いします」

カールは長老と視線を交わし、それから僕を見て、わかりました、と言った。二人の後ろにイワンがいる。イワンは笑顔で、大きくうなずいた。

僕は腰をおろし、ノートに続きを書きはじめた。そう、あの話の続きだ。ハッピーエンドに持っていったら、状況が好転するに違いない。

---

しばらくすると、森の生き物たちがやってきた。小鳥とリスだ。父親は追い返そうとしたが、帰ろうとしない。娘が戻り、どうしたのかと尋ねた。父親はいまいましそうに言った。「こいつらが勝手にやってきたんだ」

生き物たちは娘に言った。「あなたのお母さんが大変な重傷を負われたこと、本当に申し訳ない思いでいっぱいです。どうか、私たちに看病させてください」娘は父に言った。「みんな、お母さんの看病をしたいって言ってるわ」「知るか」父親は吐き捨てるように言うと、母親をソファに寝かせた。

小鳥たちは開け放たれたドアから入り、母親のところへ飛んでいった。

「来るな、帰れ！」父親は両手を激しく振りながら叫んだが、小鳥たちは出ていこうとしない。娘は家の中へ入り、父親に頼んだ。「お願い、看病をさせてあげて」小鳥たちも懇願するように母親の周りを飛んでいる。父親はため息をつき、しぶしぶ受け入れた。

小鳥たちは持ってきた薬草を台所に落としたり、リスたちも木の実を持ってきていた。小鳥たちは木の実を運び、娘が薬草と木の実をすりつぶした。そうしてできた塗り薬を、母親の胸の傷に塗った。母親は一瞬うめき声をあげ、父親は見つられずに顔を両手で覆った。だがすぐに母親はおだやかな顔になり、礼を言った。「ありがとう。小鳥さん、リスさん」小鳥とリスは喜んで帰っていった。

そのあとやってきたのはクマたちだった。

父親は叫んだ。「帰れ！ お前らの顔なんか見たくもない、帰れ！」

「あなた、そんなことを言わないで。中へ入ってもらってください」

父親は驚いた。「なぜだ。お前を傷つけたのはクマじゃないか」

「分かっています。でもわざとやったのではないのです。あなたの構えた銃が私のほうに向いたので、危ないと言ってくれたのです」

「私がお前を傷つけようとしたと言うのか」「そうではありません。私があなたから銃を奪おうとしたとき、偶然私の方へ銃口が向けられてしまいました。あのクマは私を守ろうとしてくれたのです」

「なんだって……？」父親はつぶやき、その場に座って考え込んでしまった。

母親はクマたちに言った。「どうか皆さん、中へ入って、私のところへ来てください」クマたちは顔を見合わせた。入るべきかどうか、迷っているようだった。娘が言った。「お願い、お母さんのそばに行ってください」クマたちはうなずいて中へ入り、母親のそばへ行った。

ソファに横たわった母親は、クマたち一人一人の手を握って言った。

「ありがとう。来てくださって嬉しいわ。あのクマさんは、無事かしら？」

「無事です。お嬢さんのおかげで、一命をとりとめました」

「よかった……」母親は心からホッとしたようにつぶやいて、娘に言った。

「ありがとう。あなたのおかげで、森の生き物を殺さずにすんだわ」

「私、あのままじゃクマさんが死んでしまうと思ったの。だから……」

「それが大事なのよ。ひどいことをされたと思っても、ひどいことをやり返してはいけないわ。お互いやり返していたら、いつまで経っても仲よくなれないもの」

「ありがとうございます。そう言ってもらえると、彼も安心するでしょう。どうかお大事に」

クマたちは立ち上がり、家を出ようとした。そのとき、さきほどのクマが息を切らしてやってきた。娘の姿を見てクマが言った。「すみません、本当にすみませんでした。あの、おわびにお花を持ってきました」

「お花ですって？」娘は驚いた。母親はソファーに横になったまま手招きをした。

「どうぞ、入ってきて」クマは遠慮がちに中へ入ると、母親のところへ行った。

「お花を持ってきてくださったの？」母親が尋ねると、クマは背中に持っていた花を見せた。それは、母親の好きなユリの花だった。「まあ、私の大好きなユリの花。どうして分かったのかしら」

クマは言った。「テーブルの上に飾ってあったので、きっと好きなんだろうと思って」母親はにっこり笑った。「本当にありがとう。嬉しいわ」クマはホッとして、おじぎをして帰ろうとした。先に来ていたクマたちも口々に、失礼します、と言いながらドアへ向かった。

「お前は」

クマたちが振り返ると、父親が立っていた。右腕を肩の高さまで上げ、母親を傷つけたクマを指さしている。全員が緊張した。母親は、クマにもらった花を見せた。「このお花、あのクマさんが持ってきてくださったのよ」

父親は花を見てハッとした。「これを、あいつが……？」母親はうなずいた。父親はさきほどのクマのところへずんずんと歩いていった。娘は止めようとしたが、母親がさえぎった。

「大丈夫。黙って見ていらっしゃい」「でも……」

両親を交互に見ながら、娘はハラハラしていた。

父親はさきほどのクマのところへ歩み寄り、じっとその顔を見つめた。クマたちは息をのんだ。父親がクマを傷つけるのではないかと思ったからだ。だが父親はクマの両手を取り、ありがとう、と言った。これには全員が驚いた。言われたクマも、目を白黒させている。娘が言った。「ありがとう？」

父親はクマを見つめたまま言った。「そうだ。妻の大好きなユリの花を持ってきてくれた。あれは、この森にしかないユリだ。でもなかなか見つけられなくて、違う花をテーブルに飾っていたのだよ」

「えっ、そうなの？」娘は驚き、母親の持っている花と、テーブルの上の花を見比べる。「なにも変わらないように見えるけど……」

母親が言った。「些細な違いなの。花びらのここのところ、色が違うでしょ」

娘はもう一度、じっと二つの花を見比べた。

「本当だ！ でもこんなの、誰も気づかない。なんで分かったの？」

クマが照れ臭そうに言った。「実は、テーブルの上の花を見たとき、きっとこの花を探しているんだろうと思ったのです。この花は、なかなか見つけれないので有名ですから」

父親はもう一度、クマの両手を握って言った。「本当にありがとう。妻が言っていた。きみは妻を守ろうとしてくれたのだと。私は恥ずかしい。妻が傷つけられたことで、すっかり動転してしまった。許してくれ」

クマはあわてて言った。「そんな、謝らないでください。奥さんを傷つけたのは事実ですから」

母親がソファに寝そべったまま話しかけた。

「ねえあなた、せっかく皆さんが来てくださってるから、お茶でも淹れましょう。小鳥さんとリスさんもおよびして」「そうだな、うん、それがいい。何か食べるものはあったかな」

娘が言った。「昨日作ったアップルパイがまだ残ってるわ。それから朝の残りのシチューも」

そのあとハッとして、恥ずかしそうに言った。「ごめんなさい、残り物ばかりで」

みんな笑った。父親も母親も、それからクマたちも。みんなとても嬉しそうだった。

夫婦と娘は、森の生き物たちとすっかり仲よくなった。母親の大好きなユリの花は、一家の庭にたくさん植えられている。それから森の真ん中の、広いスペースにも。

そのスペースは憩いの場だった。みんなここに集まって、森で暮らすルールを話しあったり、親睦を深めたり。ときには喧嘩もするが、喧嘩したあとは必ずもっと仲よくなっている。森の生き物たちと暮らす人間として、夫婦と娘は取材も受けるようになった。森の暮らしがいいものだと分かると、人間たちがたくさんやってきた。でもみんな仲よく暮らしている。

娘はとても嬉しかった。人間もクマも、小鳥もリスも、おたがいを思いやって暮らすことができるのだ。母親が言っていた「ひどいことをされたと思っても、ひどいことをやり返してはいけない」というセリフを胸に刻み、今日も一家は森での暮らしを楽しんでいる。

~おしまい

---

最後まで書き上げると、汗をぬぐった。

「できたんですか」カールの言葉に僕はうなずいた。「長老に伝えましょう」カールもほほ笑んでうなずいた。

長老を探すと、出入り口付近に立っている。外を見ているようだ。そばへ駆け寄り、できました、と言いかけたとき、こっちへ来るぞ、と声がした。来る？ 誰が？ 全身に緊張を感じながら、ゆっくりとテントの外へ目をやった。

「これは……！」

先ほどまで背の高い草が生い茂っていた原っぱには、見渡す限りユリの花が咲いている。かおるの母が大好きだった、あの花だ。 その中を、かおると総司令官が連れだって、ニコニコしながら歩いてくる。さっきまで、あんなに敵対しあっていたのに。

「さすがはあすなるさんじゃ」長老は、にやりと笑った。「は、はあ」目の前の光景が信じられなくて、ほっぺたをつねった。「あいてて」夢じゃない。本当に、クマと人間は仲よくなったのか。

## 生じた変化

---

かおるたちはテントに上がる階段のところまで来て立ち止まった。総司令官が言った。

「やあ、クマの皆さん、ごきげんよう。突然の訪問で申し訳ありません。かおるがどうしても寄ってほしいと言うので、厚かましくもやってきました。上がってもよろしいでしょうか」

長老はにっこり笑った。「もちろんです。喜んでお迎えます」それからテントの中へ向かい、お茶の用意を、と叫んだ。僕はまだ戸惑っていた。放置したお話を完成させ、戦いが終わったのだ。もっと喜ぶべきなのに。しばらく考えて、信じられないのだと思った。何しろ、激しい変わりようだ。さっきまで戦っていたのは何だったのだろうとさえ思われる。

二人を招き入ると、長老は言った。「今年もユリの花が咲きましたな」

総司令官はうなずいた。

「本当にありがたいことです。妻の命日にこの場所でユリの花を見ると、今でも隣に妻がいるように思いません。何しろあれは、森が大好きでしたから」

かおるが言った。

「母の好きな花をここに植えてくださって、本当にありがとうございます。私からもお礼を申し上げます」「いやいや、わしのした事などたかが知れておる。礼ならカールと、こちらのあすなるさんに言ってください」

え？ 僕？ 戸惑う僕に二人は頭を下げ、なんとお礼を申し上げたらいいか、と言っている。僕はあわてた。そんな、何もしてないのに……。そこへカールがやってきたので、カールさん、この方たちがお礼を言いたいそうです、と言って逃げ出した。

二人はカールにも丁寧に礼を言っている。ウソみたいだが、もちろんウソではない。僕が前に書いたお話にけりをつけ、そのおかげで今回放置したお話にも変化が生じているのだ。

そうだ、もしかしたら、カールの父親は火あぶりにはなっていないかもしれない。ほかに変わった点があるかも……。

お茶の用意ができました、とナンシーが言いに来て、それを合図にカールがちょっと失礼、と座を外した。このときとばかり、僕はカールに話しかけた。

「カールさん、ちょっといいですか」「もちろん」

「突然変なことをうかがいますが、お父さんはご存命ですか」

「はい、元気です。父がどうかしましたか」

「あ、いえ……」カールの父は生きている。では祖父は？ あのクマの額には、傷があるだろうか。

「変なことついでにうかがいますが、お祖父さんの額には傷がありますか」

「祖父の額に、ですか。えーと……」少し考えて、カールは言った。

「ありましたね。かおるさんのお母さんを傷つけてしまって、お父さんに撃たれたと言っていました」

なるほど、あのお話のとおりなのか。と、いうことは……。

もう死んでいるとしても、街なかで撃たれてはいないのだろう。



## イワンの不在

---

「失礼ですが、お祖父さんはご存命ですか」

カールは首をかしげ、不思議そうな顔をしながら言った。

「いえ、つい先日亡くなりました。かなり長生きでしたが、寿命でしょう」

「そうですか……」

僕が考えていると、カールが申し訳なさそうに言った。

「すみませんが、長老によばれていますので」

見ると、長老が手招きをしている。

「あ、ああ。すみません」

カールは笑顔で失礼、と言うと、長老のほうへ歩いていった。

かおると総司令官は長老の隣に座って、お茶を飲みながら談笑している。急に全身の力が抜け、立っていられずに座りこんだ。終わったのか……。そのあと、しみじみと思った。そうだ、終わったのだ……。

「あすなるさん、ありがとう」

あたりを見まわしたが、見える範囲には誰もいない。でもたしかに声がしたのだ。ふと、背中に重みを感じた。この重みは……。振り向くとヨハンがいた。ヨハンは僕を見て、嬉しそうに笑った。

「お疲れさまでした」

「ああ、本当に、疲れたよ」僕も笑った。

「でも、よかったな、本当に」人間とクマが仲よく暮らせるようになった。それが何より嬉しかった。僕が書きたかったのも、そういう話だったのだ。

ここへ来たころのことが思い出された。ヨハンが突然現れてこの世界へ連れてこられ、いやというほど背中を打った。その痛みもひかないうちに、イワンにはあからさまに敵視されたっけ。そうだ、イワンはどうしたのだろう。僕はあたりを見まわした。おかしいな、続きを書く前はここにいたのに。

「なあヨハン、イワンを知らないか」

僕が尋ねると、ヨハンは悲しそうな顔をした。

「どうしたんだ。なんでそんな、悲しい顔を」

「あすなるさん」ヨハンは今にも泣きそうだった。

「イワンは、もういないんです」

「もういない？ どういうことだ」

「あすなるさんが前の物語を書き終えたから、イワンは生まれないことになったんです」

なんだって？

「分かるように説明してくれ」

ヨハンはうなずいて話し始めた。

「カールさんのお祖父さんが額に傷をつけて帰ったのを見て、クマたちは人間をやっつけようと考えました。そのために強いオスのクマと頭のいいメスのクマを結婚させて、子どもを作ったのです。それがイワンです」

## 物語の終わり

---

「イワンのお父さんとお母さんは、復讐するための道具として子どもを作りました。でも二人とも子どもが大好きだったのです。だから、イワンを育てるのが辛くなってしまって……」

「辛くなって、それでどうしたのだ」

「それでお父さんとお母さんは、森の奥の、底なし沼に身を投げて死んでしまいました」

「そんな、イワンの両親は早く死んで、それでカールに育てられたとかおるが」

そうか。そうやって両親を失ったから、カールはイワンを引き取ったのだ。人間と仲よくすることを、教えたかったのかもしれない……。

この世界で、イワンと過ごした日々を思い返した。最初はなんて嫌なやつだと思ったけれど、深く知るとつれ、こんないいやつはいないと思うようになった。あのイワンが、人間への憎しみから生まれていたなんて……。

「だからイワンがいなくなったのは、いいことなんです」 ヨハンは泣きたいのを必死で我慢している。僕もつられて泣きそうになった。

ヨハンの言うとおり、イワンがいらないのは喜ぶべきことだ。森の平和が実現されたのだから。でも、もう二度と会えないと思うと、言葉では言えないくらいさみしかった。心にぽっかりと穴があいたような、という表現があるけれど、まさにそんな感じだ。僕は心の中でイワンに語りかけた。きみのことだから、どこか別の世界へ行っているかもしれないね。どこにいてもいい、どうか達者でいておくれ。

「ねえ、あすなろさん」

「ん？」

ヨハンはちょっと不安そうに言った。

「これからは、誰も火あぶりにしないでくださいね」

僕は笑って言った。

「ああ。もう火あぶりにしはしない。ほかのことで、もうクマを傷つけないし」

「本当ですか？」

「本当だとも。約束する」

ヨハンの顔に大きな笑みが広がった。今までに見たことのない、満面の笑顔だった。

「ありがとう！ あすなろさん、大好き！」

ヨハンは僕の首に飛びついた。

「おいおい、やめてくれよ」

「ひどい、私じゃ嫌ですか？」

よく見ると、僕に抱きついてるのはかおるだった。まさか。かおるが、そんなことをするはずがない。いやでも、分からないぞ。さすがですね、と二回くらい言われたし、人質交換に行くときは、あんな顔をしていたし……。

「あすなろさん、どうしたんですか？ 具合でも悪いんですか？」

「いや、別にそんなことは……」

「じゃあ、またかけます」

またかけます？ 「かおる、さん……？」

その瞬間、僕は背中に大きな衝撃を感じた。まるで、お話の世界に入ったときみたいな……。

不快な音が、繰り返し頭の中で鳴っている。まるで頭に何本も釘を打ち込まれたようだ。僕は目を開けた。天井が高い。寝室の天井は、こんなに高かったらろうか。下に手をつくすと、ひどく固い感触があった。ベッドに寝ているのではないのか？

首を横に傾けると激しい痛みを感じ、思わず目を閉じた。ゆっくり目を開けると、すぐ近くにベッドの脚がある。床か？ ベッドの脚から上に目をやる。ベッドにかかっている布団は、たしかに僕が買ったものだ。そうか、床に寝ているから、だから天井が高いのだ。

「ベッドから落ちるなんて」

子どもみたいだ。まったく、僕としたことが。ふっと笑いがもれ、次の瞬間、ふう、とため息をついた。また音がした。さっきと同じだ。しばらくして、聞き慣れた声がした。

「あすなろです。ただいま留守にしております。伝言を残していただくか、ファックスをお送りください」

「永坂です。あすなろさん、どこにいるんですか。何度も電話してるのに……」

永坂さんの声が、なんだか懐かしかった。ずいぶん長い間、留守にしていた気がする。

「とにかく、色んなことがあったよなあ」

いや、そんな気がしているだけじゃないか？ 実は、夢を見ていたのでは……？ そのとき、右手の感触に気がついた。何かを手を持っているようだ。右手を目の近くまで上げる。ノートだった。お話の世界へ入るとき、持って行った。ページをぱらぱらとめくる。たしかにお話の続きが書かれていた。あれは夢ではなかったのだ。クマと人間の争いは起こらないことになり、イワンは消えた……。

おしまいまで見たあと、もう一度最初からページをめくった。前半はまったくの白紙だった。後半を過ぎたあたりから、あの話の続きが書かれている。ん？ 白紙だって？

そんなはずはない。前半には、旅人が森でクマに会い、鈴を返す話を書いていた。街へ行ったクマが火あぶりになる場面も。だからヨハンは、ここへ来た。もう一度ページをめくった。やはり何も書かれていない。

僕は起き上がり、書斎へ移動すると、そこにあるノートを片っ端からめくった。でも、あの話はどこにもない。いったいどこへ消えてしまったのだろう。

待てよ。僕が放置したあの話の中で、カールの祖父は街なかで撃たれ、父も火あぶりになって死んだ。だが続きを書き終えてカールに尋ねたら、祖父は寿命で死んだと言っていた。それに、父は存命だとも。ということは。

「あの話は、なかったことになったのか？」

そうとしか思えない。人間が森の生き物たちと共存できるようになった結果、クマよけの鈴も必要なくなったのだ。

## 作者の決断

---

まさか、本当にそんなことが……？ 信じられなかった。だがそうでなければ説明がつかない。僕はどうすればいいのだろう。人間は森の中でほかの生き物たちと仲よく暮らせるようになった。それは僕の望んだことだ。でも僕は……僕はこれから、何を書けばいいのだろう。

また電話が鳴った。出る気になれず放置していたら、永坂さんの声がした。僕から連絡しない限り、永坂さんは何度もかけてくるだろう。ここにいることを、知らせるべきじゃないか。でも知らせてどうする？

永坂さんに相談しようと思っていた、その作品が消えてしまったのだ。しかも作品が消えたなんて、信じてもらえるはずがない。

「いったい、どうしたら……」

僕はまた寝室へ移動して、ベッドに横たわった。考えたのは、イワンのことだった。イワンはどんな気持ちだったのだろう。自分が復讐のために生まれたこと、両親が身を投げて死んだこと、そういったことを、イワンはどう感じていただろうか。僕に敵意をむき出しにしたのも、僕が両親をひどい目に遭わせたからだ。だとしたら長老に叱られたとはいえ、僕を受け入れることに決めたとき、とても悔しかっただろう。敗北感でいっぱいだったかもしれない。長老に諭されて、一応は納得したのかもしれないが、それでも、苦渋の決断だったのでは……。

目の前がぱあっと明るくひらけていった。 そうだ、僕はこのことを書くべきなのだ！

さっそくベッドから起き上がり、書斎へ行くと、椅子に座って棚からノートを取り出した。この際、ノートはどれでもよかった。できるだけページが多く残されているものを選び、僕がお話の世界で経験したことを、ひとつひとつ思い出しながら書いていった。ただし、すべてイワンの視点から。

ヨハンが僕を連れにいくと決まってイワンがどう思ったか。おそらく無駄だと思ったに違いない。僕が向こうに行ったあと、イワンがいちいち突っかかってきたこと。僕に何ができるのかとうさんくさそうに見ていた様子。その他もろもろについて、イワンの視点を守りながら夢中で書いた。これを書くことでイワンを生かすことができる、そんな気がしていた。そのためには、お話の最後でイワンが死んでしまっはいけない。だが彼が生まれた経緯を考えると、生かしておくのも不自然だ。さていったいどうするか……。

僕は電話のところへ行き、ほふり舎へ連絡を入れた。

「あすなろです。永坂さん、いらっしゃいますか」

間もなく永坂さんが電話に出た。

「あすなろさん、いったいどうしたんですか。一週間も連絡が取れなくて、心配してたんですよ」

一週間？ そんなに経っていたのか。

「すみません、ずっと別の場所で構想を練っていたもので」

電話の向こうで、ホッとため息をつく音がした。

「それでですね、永坂さん。大体のプロットはできたんですが、終わりをどうすればいいか悩んでるんです。相談に乗ってもらえませんか」

永坂さんはちょっと待ってください、と言って電話を保留にした。おそらく編集長にお伺いを立てているのだろう。だがすぐに保留が解除され、OKとの返事をもらった。

「ありがとうございます。じゃあ二十分後、いつものそば屋で。もちろん僕の奢りですよ」

「どうも、今日はありがとうございました。これからもよろしくお願いします」  
サインをしたあと、握手をしてお礼を言い、場合によっては一緒に写真も撮る。  
一連の作業を二百人分終わると、もうくたくただった。早く帰って風呂に入りたかった。  
「あすなるさん、お疲れさまでした。このあと軽く一杯、どうですか？」  
永坂さんはそばを食べる手つきをした。  
「いや、すみません。今日はもう勘弁してください」  
「そうですか……。仕方ないですね。じゃあ例の件、考えておいてください」  
僕はあいまいにうなずいて、会場をあとにした。

僕の冒険譚は大ベストセラーになった。タイトルは『あしたのおはなし』。あしたというのは明日でもあり、朝でもある。朝は一日の始まりだ。そして明日は未来。この作品で作者は新しい未来を切りひらいた、というのがおおかたの評価だった。

イワンの視点から書いたこの作品では、自分が人間への復讐のため生まれたと知り、悩み苦しむ様子が共感をよんだ。作者がお話を完成させると自分は消えてしまう。それが分かっているにも、森に平和が訪れると信じて作者を鼓舞する。そこがいちばん感動的だった、と多くの読者がアンケートに書いていた。平和を望むイワンの思いが読者に伝わった、それが何より嬉しかった。

あの日、そば屋での打ち合わせを経て、イワンの生死を明らかにしないことにした。おそらく生きているのだからその物語の中では生きられない、そういうことにしましょうと、永坂さんが言ったのだ。僕はホッとした。自分でもそう思っていたが、いまひとつ確信が持てずにいたのだ。僕がノートを見せたら、永坂さんは大好物のそばを食べるのも忘れて読みふけた。そして読み終わると、真剣な顔で僕を見て言った。「あすなるさん、これはいけますよ。絶対売れます」

その言葉どおり作品は大ベストセラーになった。サイン会ができたことは嬉しいし、よかったと思う。これまで大して売れなかった作品も、つられるように大增刷がかかった。望んだ成功を手に入れたのだ。だが以前に思っていたよりも、その喜びは小さなものだった。

今、永坂さんから連載を持ちかけられている。それが無理なら一度だけの対談あるいはインタビューを受けてほしい、そう言われているのだ。だがどうも気乗りがしない。何と言って断ろうか、そればかり考えている。

家に帰った僕は、まず書斎へ行くと、上着を脱いで椅子の背にかけた。そして大きく伸びをすると、寝室へ移動し、ごろんとベッドに横たわった。

連載する気にならないのも、対談・インタビューを受ける気にならないのも、別の思惑があるからだ。野望と言ってもいい。対談やインタビューは必ず次があるし、連載は途中でやめることができない。どうしても体をあけておきたいのだ。

だが……。僕はため息をついた。少なくとも今は、それが実現できるめどは立っていない。

## エピローグ～新たな始まり

---

イワンの視点から物語を書き、結末では生死を明らかにしなかった。それによってまたヨハンが、あるいはイワンやかおるが会いにきてくれるのではないかと、そう期待した。だがこの一年、誰も訪ねてこなかった。

もちろん物語の中で暮らす人々のことを考え、彼らができるべく穏やかに、そして幸せに暮らせるよう心がけたつもりだ。だから本当に幸せなのか僕は知りたいし、知る権利があると思っている。いや、義務と言ってもいいだろう。幸せでないなら僕が行って何とかしなければならぬ、そう思っているからだ。

「こんなことを野望だなんて言うのは、おかしいだろうか」

やはり疲れているようだ。風呂に入って寝よう。起き上がり、部屋を出ようとして、ふと背後に気配を感じた。

「ずいぶん弱気になってるじゃないか」

息が止まりそうになった。この声は……。

「早いもんだ。もう一年になるんだな」

僕はたまらず振り向いた。

「イワン！」

その姿が涙でぼやける。イワンが、僕の目の前にいる……。

「泣くなよ、しょうがないやつだな」

イワンはそう言って笑った。その笑顔は、一年前と何も変わらない。僕は涙をふいて、精いっぱい笑顔でイワンを迎えた。おかえり、と言いたい気分だった。

イワンの背後で動くものがあった。見ると小さなクマが顔を出している。ヨハンではないようだ。僕と目が合うと、あわててイワンの背中に隠れた。もしかしたら

「子ども、なのか？」

「ああ」イワンは照れ臭そうに笑い、すぐに真顔で言った。

「実は、困ったことになっているんだ。おれがいる世界では子グマが高値で取り引きされていて、こいつも生まれたときから狙われている。だから

「一緒に来て助けてほしい、だろ？」

イワンは笑顔でうなずいた。

「ちょっと待ってくれ、準備する」

僕は書斎へ行き、ほぶり舎に電話をかけた。

「あすなるですが、永坂さんは、あ、そうですか。じゃあ例の件はなかったことにしてくださいと、そう伝えてもらえますか。よろしくお願いします」

電話を切ると、晴々とした気持ちでペンとノートを抱え、イワンのところに戻った。

「よし、頼むぜ作者さん。よっ、こらせっと！」

イワンのひと言で、僕たちは渦の中へ巻き込まれた。子グマも必死でしがみついている。こんどはどんな物語が、僕を待っているのだろう！

< 終わり >

ある戦いの物語

<http://p.booklog.jp/book/23642>

著者 : miki-hiraoka

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/miki-hiraoka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23642>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23642>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社 paperboy&co.